

中央区男女共同参画に関する  
アンケート調査

報 告 書

【概要版】

令和4(2022)年3月

中 央 区



# アンケート調査の概要

## 1 調査の目的

この調査は、区民の男女共同参画に関する意識・実態や区の施策に対する要望等を総合的に把握し、「中央区男女共同参画行動計画 2018」の改定に反映させるための基礎資料として活用することを目的に実施した。

また、満 18 歳以上を対象とする上記の区民調査とは別に、増加する若年層の結婚や固定的性別役割分担、デートDV、悩みに関する意識・実態を把握し施策に反映するため、中学生・高校生世代の区民を対象とした調査を実施した。

## 2 調査の仕様

### (1) 区民調査

- ① 調査対象 中央区に居住する満 18 歳以上の区民
- ② 対象者数 2,000 人
- ③ 抽出方法 無作為抽出
- ④ 調査方法 郵送配布一郵送回収法（督促を兼ねた礼状ハガキ 1 回送付）
- ⑤ 調査期間 令和 3 年 9 月 21 日（火）～10 月 12 日（火）（22 日間）

### (2) 若年層調査

- ① 調査対象 中央区に居住する平成 15 年 4 月 2 日から平成 21 年 4 月 1 日までに生まれた方（中学生・高校生世代の区民）
- ② 対象者数 504 人
- ③ 抽出方法 年齢別・男女別に無作為抽出
- ④ 調査方法 はがきで協力依頼を送付、WEB 回答
- ⑤ 調査期間 令和 3 年 10 月 1 日（金）～10 月 18 日（月）（18 日間）

## 3 回収数及び回収率

### (1) 区民調査

- ① 対象者数 2,000 人
- ② 有効回収数 646 人（女性:412 人、男性:221 人、その他:1 人、性別無回答:12 人）
- ③ 回収率 32.3%

### (2) 若年層調査

- ① 対象者数 504 人
- ② 有効回収数 175 人（女性:91 人、男性:82 人、その他:2 人、性別無回答:0 人）
- ③ 回収率 34.7%

## 4 調査項目

## (1) 区民調査

大項目	調査項目
回答者のプロフィール	F1 性別
	F2 年齢
	F3 居住地域
	F4 居住歴
	F5 一緒に暮らしている人
男女平等意識	問1 「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方について
	問2 各分野における男女の地位の平等感
	問3 重要な企画や方針決定の際に女性の参画が少ない理由
	問4 言葉の認知度
家庭生活や地域活動	問5 配偶者の有無
	問5-1 働き手(共働き)の状況
	問6 主に家事・育児・介護を担っている人
	問7 家事・育児・介護に携わる1日あたりの時間
	問8 現在、介護を行っているか
	問8-1 介護の負担感
	問9 男性が家事・育児・介護に参加するために大切なこと
	問10 地域活動への参加状況・参加意向
	問10-1 地域活動に参加していない理由
	子育て・教育
問12 学校教育の中で行われるとよいと思うこと	
問13 子育てをしやすくするために区が進めるべき施策	
働き方	問14 現在の職業
	問14-1 職場における仕事と子育て・介護の両立に対する配慮の有無
	問14-2 働いていない理由
	問14-3 今後の就労意向
仕事と生活の調和	問15 仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)の望ましい姿
	問16 仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)の現在の状況
	問17 仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)を推進するために必要なこと
健康・人権	問18 健康に関する欲しい情報
	問19 配偶者暴力防止法の認知度
	問20 配偶者・恋人などから暴力を受けた経験の有無
	問20-1 受けた暴力についての相談先
	問20-2 誰にも相談しなかった理由
	問21 ドメスティック・バイオレンス(DV)について見聞きしたことがあるか
	問22 配偶者や恋人などの間で起きる暴力を防止するために必要だと思うこと
性的少数者、LGBT等	問23 性的少数者(セクシュアルマイノリティ、LGBT等)が暮らしにくさを感じる点だと思うこと
	問24 すべての人の性の多様性が認め合える社会をつくるために区に期待する施策
防災	問25 地域の防災対策において重要なこと
	問26 防災拠点(避難所)の運営において男女共同参画の視点に配慮して取り組む必要があること
女性の活躍推進	問27 女性が働くことに対する考え
	問28 女性が出産・育児・介護により離職せず同じ職場で働き続けるために必要なこと
	問29 女性が再就職や起業にチャレンジする際に必要だと思うこと
区の男女共同参画の取組	問30 女性センター「ブーケ21」の認知度
	問31 女性センター「ブーケ21」事業の認知状況と利用意向
	問31-1 女性センター「ブーケ21」で利用してみたい、あったら良いと思う事業(自由回答)
	問32 男女共同参画を進めるために区が力を入れるべきこと
	問33 男女共同参画について日頃感じていること、区の施策について望むこと(自由回答)

## (2) 若年層調査

大項目	調査項目
回答者のプロフィール	問1 性別
	問2 学年
	問3 両親の働き方
結婚、固定的性別役割分担に対する考え方	問4 将来の働き方への希望
	問5 固定的性別役割分担に対する考え方
	問6 最近した家での手伝い
デートDV	問7 デートDVの言葉の認知度
	問8 デートDVに対する認識
悩み	問9 悩みを話す方法
	問10 相談したいことや聞いてほしいことがあったときに気軽に話せる相手
	問11 性(性的指向)や心の性(性自認)について悩んだことの有無

## 5 報告書の見方

- (1) 回答は、それぞれの質問の回答者数を母数とした百分率(%)で示している。それぞれの質問の回答者数は、全体の場合はN、それ以外の場合にはnと表記している。
- (2) %は小数点以下第2位を四捨五入し、小数点以下第1位までを表記している。したがって、回答の合計が必ずしも100%にならない場合がある。
- (3) 性別、年代別の集計結果などでは、無回答を除いているため、合計が全体とは一致しない。全体は、性別、年代やそれらの無回答者を足し合わせたものである。また、複数回答の設問では、すべての回答比率を合計しても100%にならない場合がある。
- (4) 本文の選択肢の表現は一部省略されている場合がある。
- (5) 過去の調査結果との比較では、平成28年、平成24年、平成19年に実施した「中央区男女共同参画に関するアンケート調査」と平成12年に実施した「男女平等に関する意識調査」を使用している。
- (6) 過去の調査結果との比較において、選択肢の表現が異なる場合は令和3年調査の選択肢にあわせている。また、該当する選択肢がない場合は「-」と表記している。
- (7) 令和3年調査から「18・19歳」を調査対象に含めている。そのため、経年比較をする際は「18・19歳」を除いたN=640の数値を用いて集計している。
- (8) クロス集計結果の性・年代別の「女性10代」「男性10代」は、サンプル数が少ないため傾向を見るにとどめ、本文中の分析では触れていない。
- (9) クロス集計表について、文章内で記述し、特に着目すべき箇所に網掛けをしている。

# アンケート調査結果の概要

## 区民調査

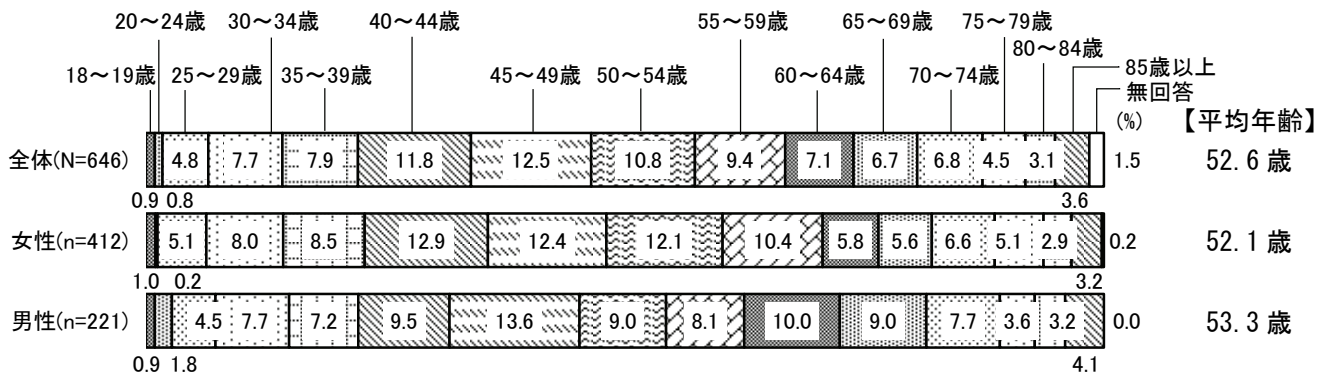
### 1 回答者のプロフィール

- ◆ 性別は、「女性」が 63.8%、「男性」が 34.2%、「その他」が 0.2%となっている。（図表 I-1-1）（F1）
- ◆ 年齢は、全体では、「45～49 歳」（12.5%）が最も多く、次いで「40～44 歳」（11.8%）となっている。性別にみると、女性は「40～44 歳」（12.9%）が最も多く、男性は「45～49 歳」（13.6%）が最も多くなっている。（図表 I-1-2）（F2）
- ◆ 居住地域は、全体では、「月島地域」（43.0%）が最も多く、次いで「日本橋地域」（31.6%）、「京橋地域」（23.7%）となっている。（図表 I-1-3）（F3）
- ◆ 居住歴は、全体では、「20 年以上」（31.4%）が最も多く、次いで「3 年以上～6 年未満」（15.8%）、「10 年以上～15 年未満」（14.4%）となっている。（図表 I-1-4）（F4）
- ◆ 家族構成を、単独世帯、夫婦のみ世帯、二世帯世帯（親と未婚の子）、二世帯世帯（親と子ども夫婦）、三世帯世帯（親と子と孫）、その他、に類型化したところ、「二世帯世帯（親と未婚の子）」（36.1%）が最も多く、次いで「夫婦のみ世帯」（31.0%）、「単独世帯」（20.0%）となっている。（図表 I-1-5）（F5）

図表 I-1-1 性別（全体）

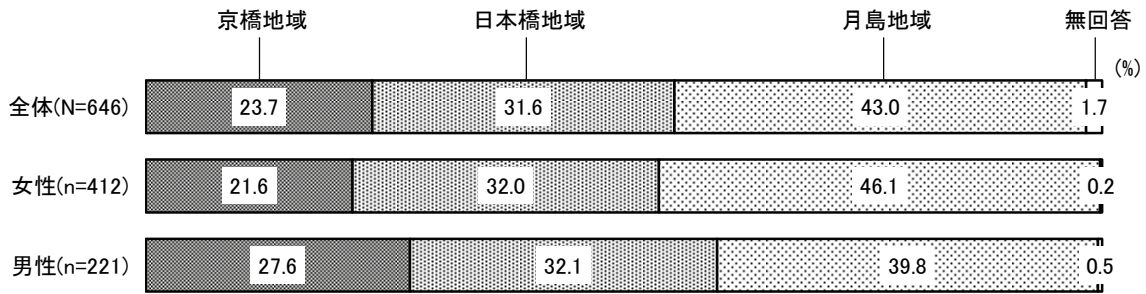


図表 I-1-2 年齢（全体、性別）

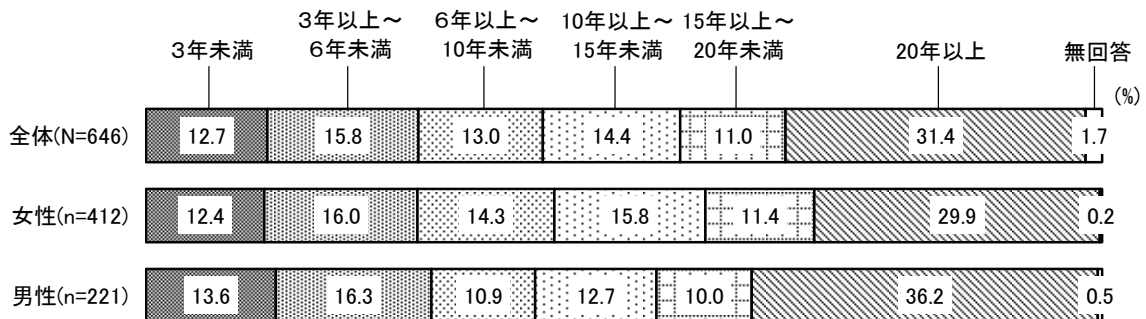


※平均年齢は無回答を除き、各中央値、「85 歳以上」は「87 歳」を用いて加重平均で算出。

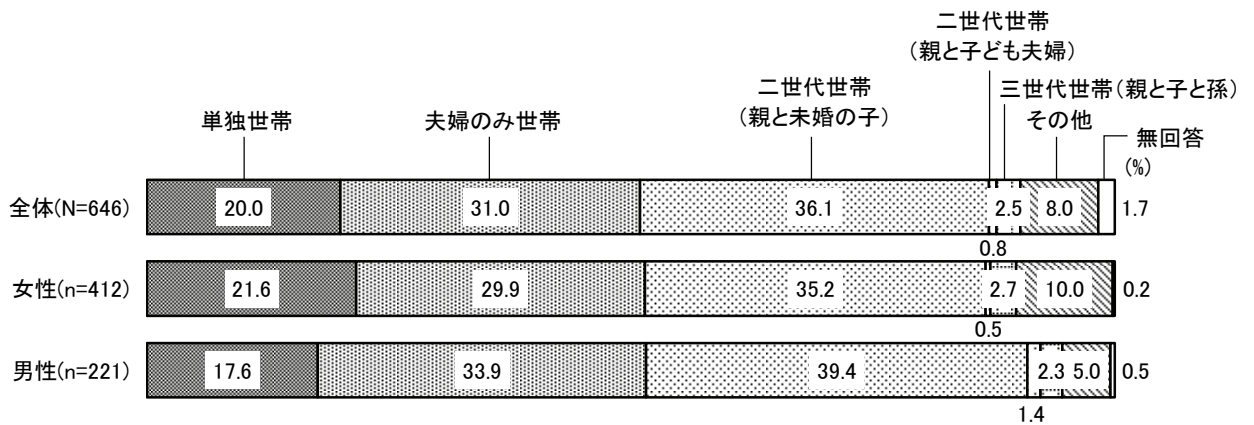
図表 I - 1 - 3 居住地域 (全体、性別)



図表 I - 1 - 4 居住歴 (全体、性別)



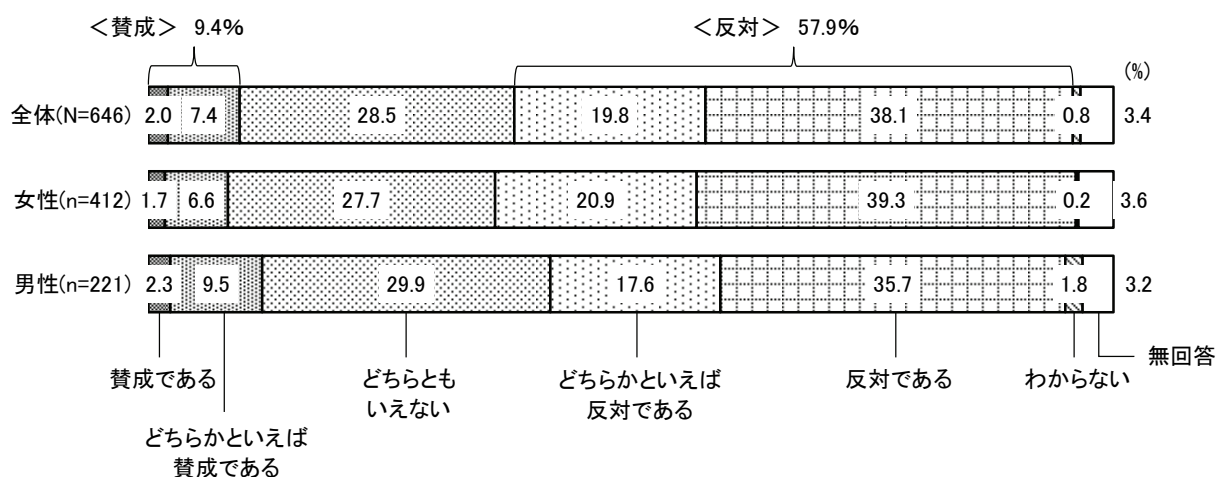
図表 I - 1 - 5 家族構成 (全体、性別)



## 2 男女平等意識

- ◆ 「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という固定的性別役割分担に＜反対＞（「どちらかといえば反対である」と「反対である」の合計）は、全体では 57.9%であり、その割合は、特に男女とも若い世代で高くなっている。性別にみると、＜反対＞は女性 60.2%、男性 53.3%となっている。平成 28 年調査と比較すると、＜反対＞（令和 3 年:57.8%、平成 28 年:50.3%）が 7.5 ポイント高くなっている。（図表 I-2-1-①、図表 I-2-1-②、図表 I-2-1-③）（問 1）
- ◆ 男女の地位の平等感について、全体では『教育の場（学校・大学）では』で、「平等になっている」が 58.2%と半数を超えたものの、それ以外の分野では『家庭では』を除きすべて＜男性優遇＞（「やや男性が優遇されている」と「男性が優遇されている」の合計）が半数を占めている。特に『しきたりや慣習では』、『政治の場では』で、＜男性優遇＞の割合が 80%を超えて高くなっている。平成 28 年調査と比較すると、『職場では』以外の分野すべてで「平等になっている」の割合が低くなっている。（図表 I-2-2-①、図表 I-2-2-②）（問 2）
- ◆ 重要な企画や方針決定の際に女性の参画が少ない理由は、全体では、「男性優位の組織運営」（63.2%）が最も多くなっている。性別にみても、男女ともに「男性優位の組織運営」が最も多く、女性は 66.7%、男性は 56.1%となっている。（図表 I-2-3）（問 3）
- ◆ 男女共同参画に関する言葉とその意味について、「言葉の意味まで知っていた」の割合が最も高いのは、全体では、『LGBT』（79.9%）で、次いで『ジェンダー平等』（70.4%）、『男女共同参画』（53.7%）となっている。（図表 I-2-4）（問 4）

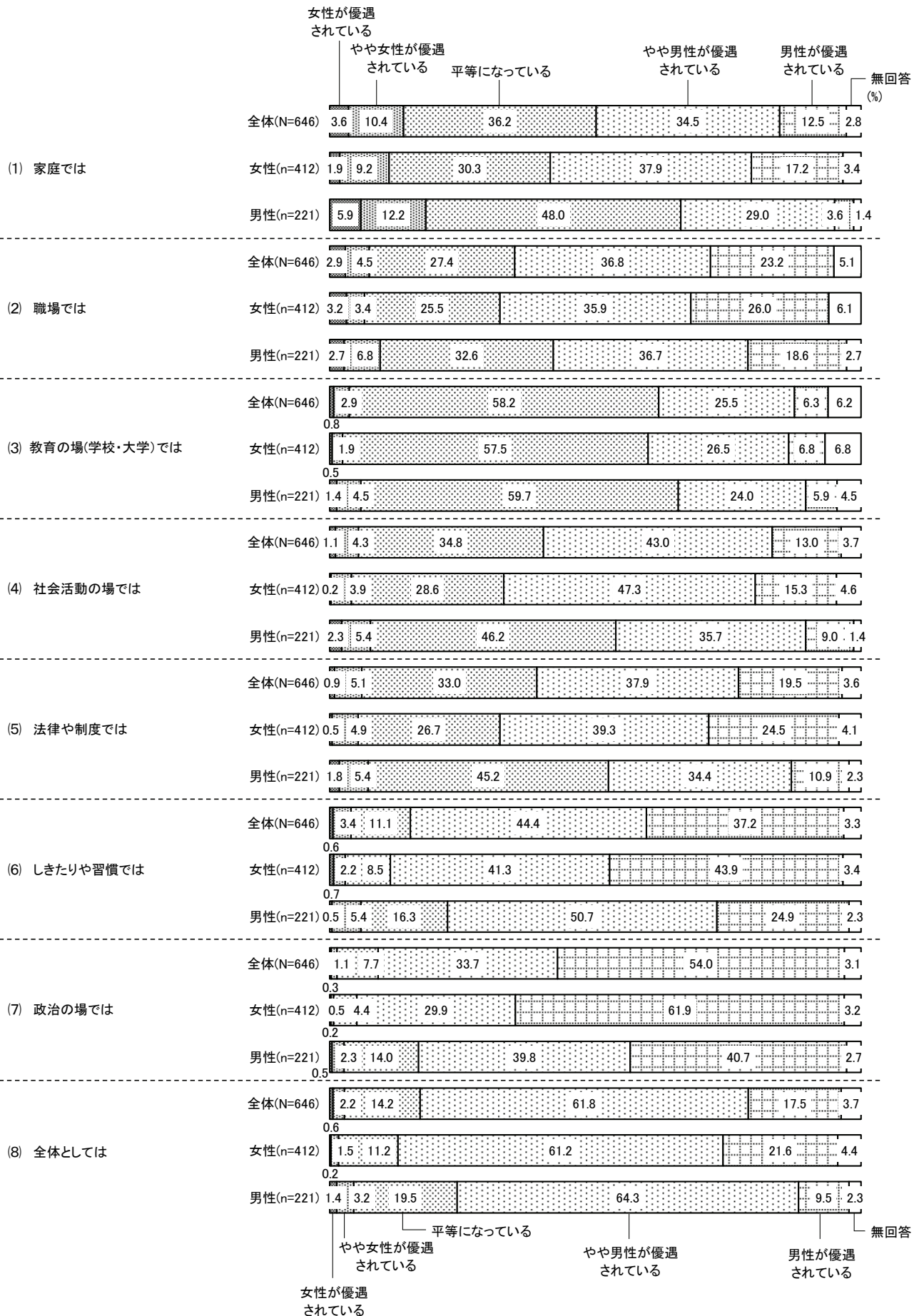
図表 I-2-1-① 「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方について  
（全体、性別）



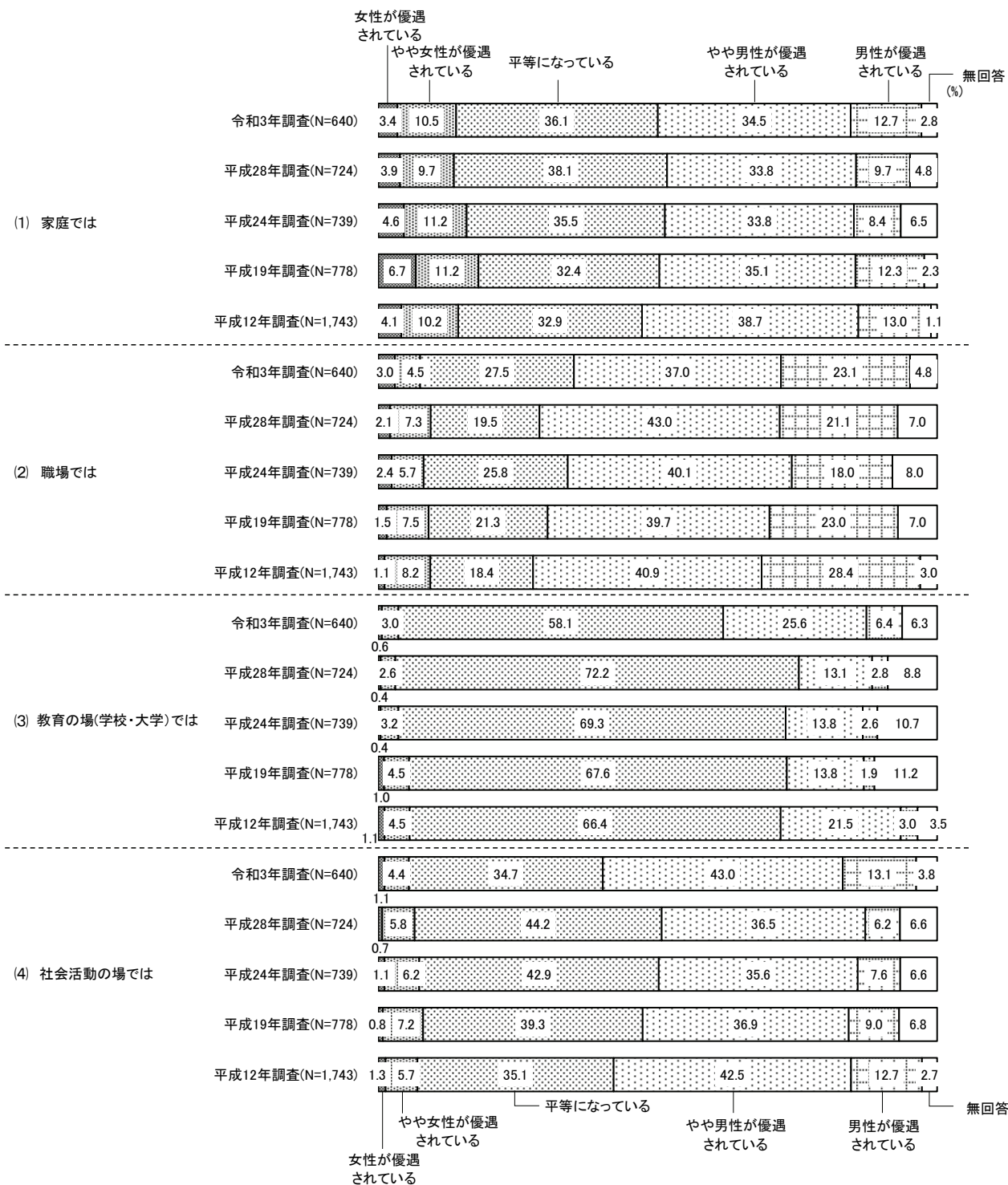




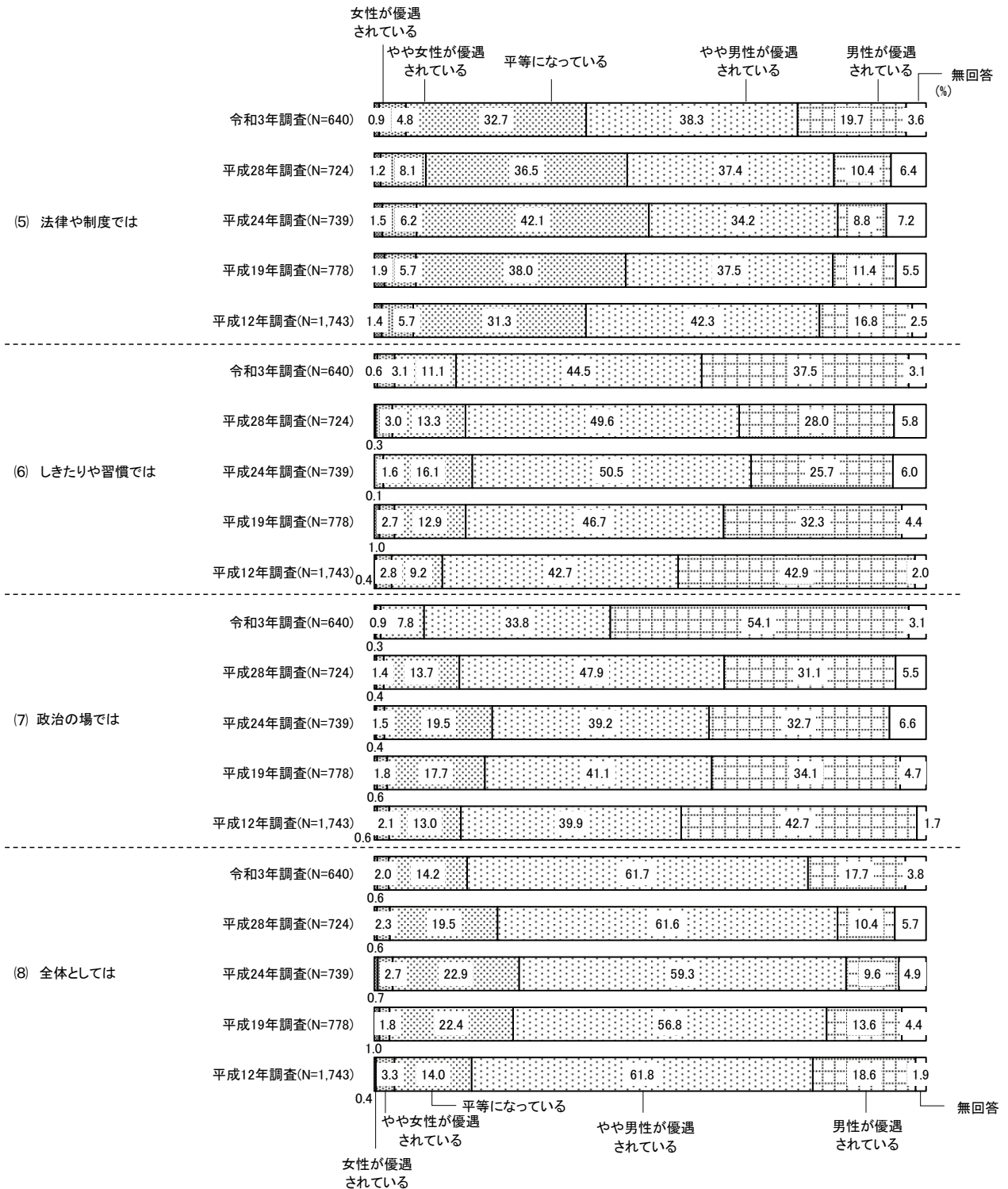
図表 I - 2 - 2 - ① 各分野における男女の地位の平等感（全体、性別）



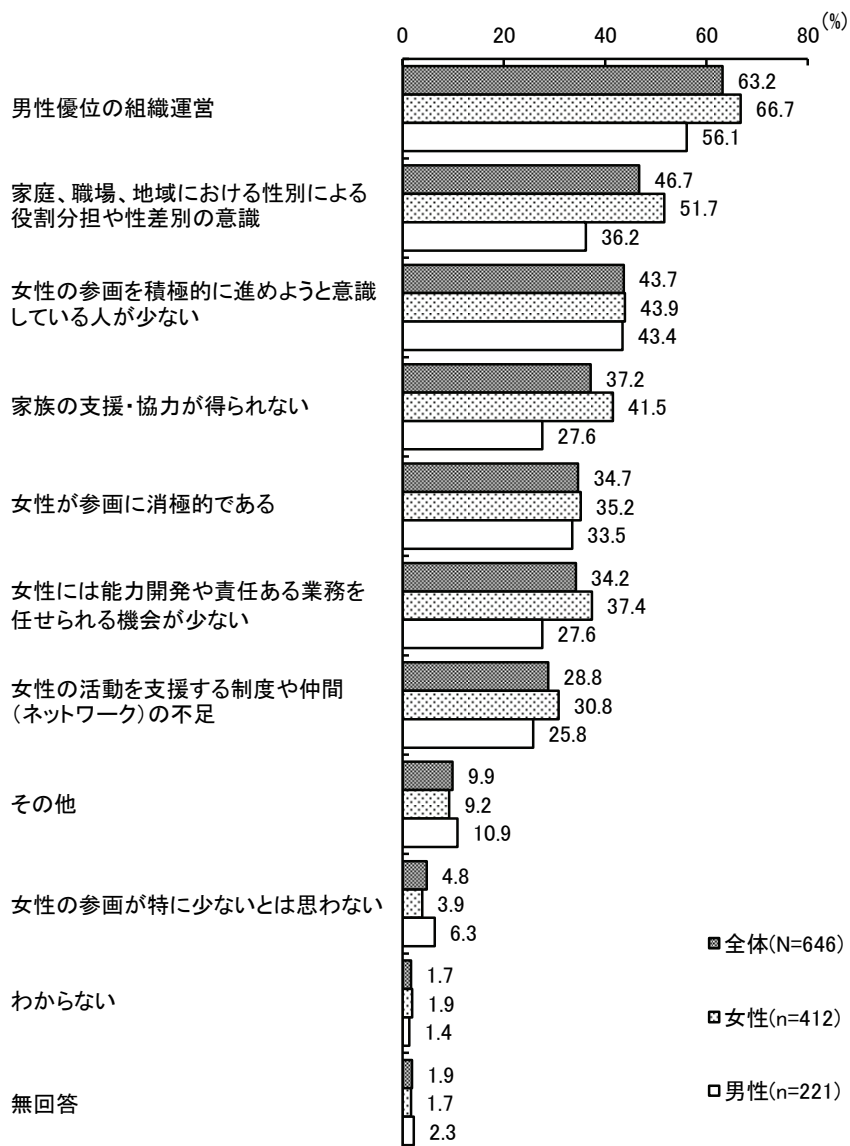
図表 I - 2 - 2 - ② 各分野における男女の地位の平等感  
(令和3年調査・平成28年調査・平成24年調査・平成19年調査・平成12年調査:全体)



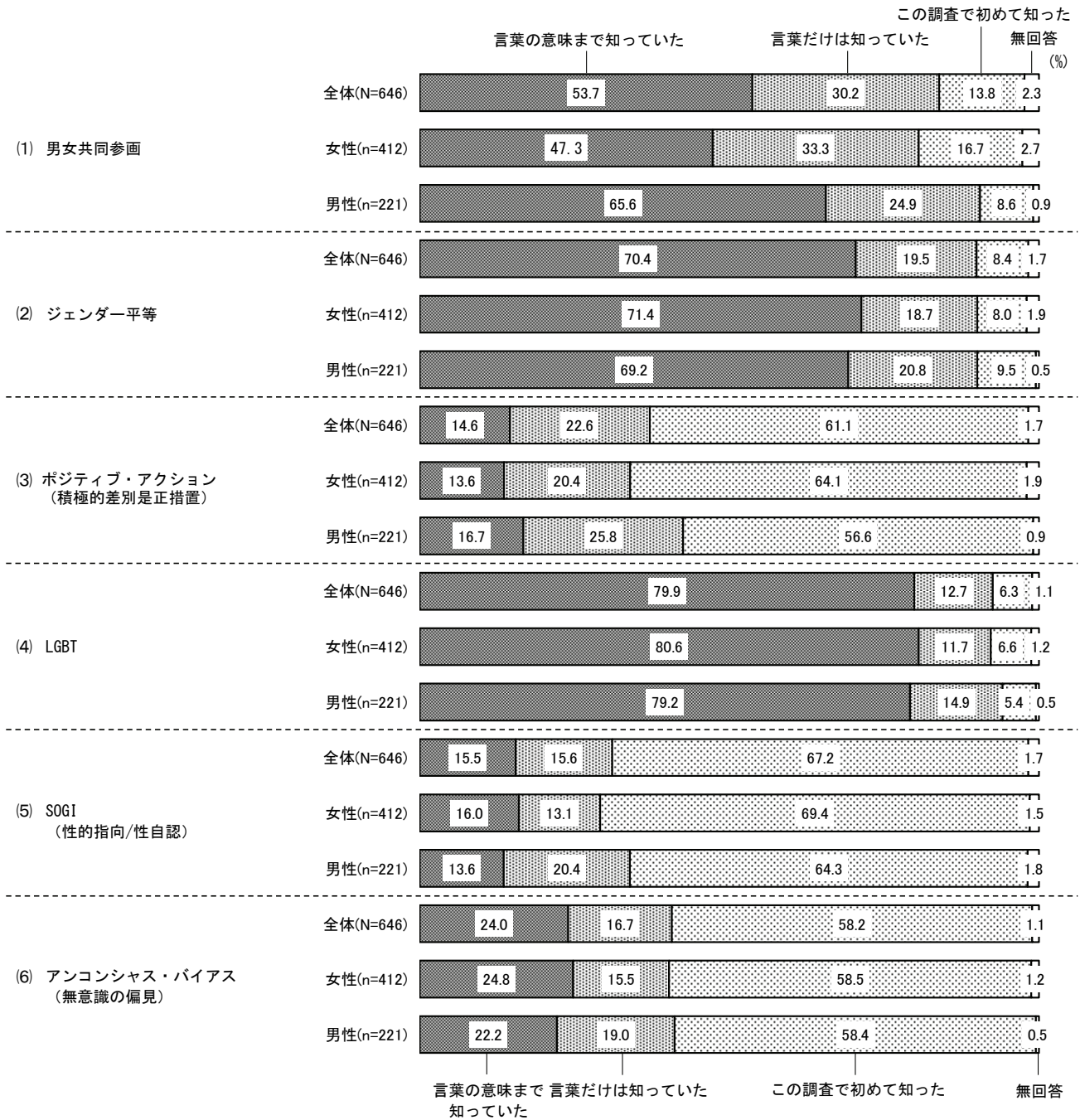
図表 I - 2 - 2 - ② 各分野における男女の地位の平等感  
(令和3年調査・平成28年調査・平成24年調査・平成19年調査・平成12年調査:全体) 続き



図表 I - 2 - 3 重要な企画や方針決定の際に女性の参画が少ない理由  
(全体、性別:複数回答)



図表 I - 2 - 4 言葉の認知度（全体、性別）



### 3 家庭生活や地域活動

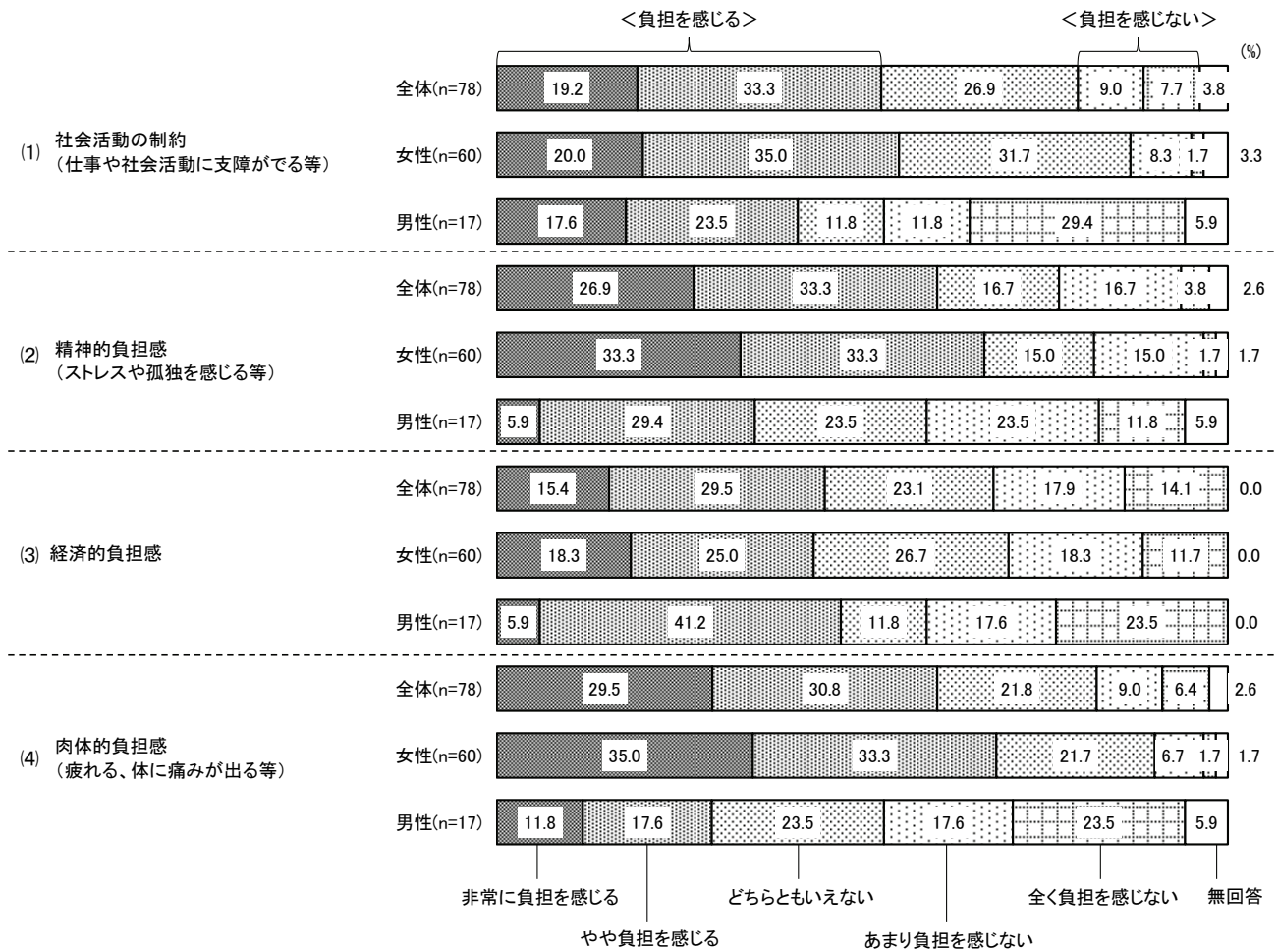
- ◆ 家事・育児・介護に携わる1日あたりの平均時間は、平成28年調査と比較すると、男女ともに平均時間は長くなっており、女性に比べて男性の平均時間の伸びが特に大きい。しかし、平日・休日ともに男性よりも女性の方が、時間数が依然長いことには変わりはない。（図表I-3-1）（問7）
- ◆ 介護を行うことの負担感については、男性よりも女性の方が社会活動の制約、肉体的負担感、精神的負担感を感じる割合が高く、女性よりも男性の方が経済的負担感を感じる割合が高くなっている。（図表I-3-2）（問8-1）
- ◆ 男性が家事、育児、介護に参加するために大切なことは、全体では、「夫婦や家族間のコミュニケーションをよくはかること」（68.9%）が最も多く、次いで「仕事と家庭の両立に対する理解が得られやすい職場の風土づくりをすること」（52.6%）、「働き方の見直し等により、仕事以外の時間を多く持てるようにすること」（51.5%）となっている。性別にみても、「夫婦や家族間のコミュニケーションをよくはかること」が男女ともに最も多く、女性が70.4%、男性が67.0%となっている。（図表I-3-3）（問9）
- ◆ 地域活動に参加している人は、全体では、48.8%であった。また、現在参加している地域活動は、女性は『趣味・生涯学習・スポーツなどのサークル活動』（19.7%）、男性は『町会や自治会の活動』（19.5%）が最も多くなっている。今後参加したい活動は、男女ともに『趣味・生涯学習・スポーツなどのサークル活動』（女性:51.0%、男性:48.0%）が最も多くなっている。（図表I-3-4-①、図表I-3-4-②）（問10）
- ◆ 地域活動に参加していない理由は、全体では、「時間的余裕がないから」（54.7%）が最も多く、次いで「どのような活動があるのかわからないから」（38.7%）、「参加方法がわからない、きっかけがないから」（33.2%）となっている。（図表I-3-5）（問10-1）

図表I-3-1 家事・育児・介護に携わる1日あたりの時間〔平日・休日〕  
（令和3年調査・平成28年調査:全体、性別）

		平均	
		平日	休日
全体	令和3年調査 (N=640)	178.9	232.7
	平成28年調査 (N=724)	149.0	205.0
女性	令和3年調査 (n=408)	221.5	267.9
	平成28年調査 (n=434)	196.4	245.5
男性	令和3年調査 (n=249)	99.4	165.7
	平成28年調査 (n=257)	65.1	134.1

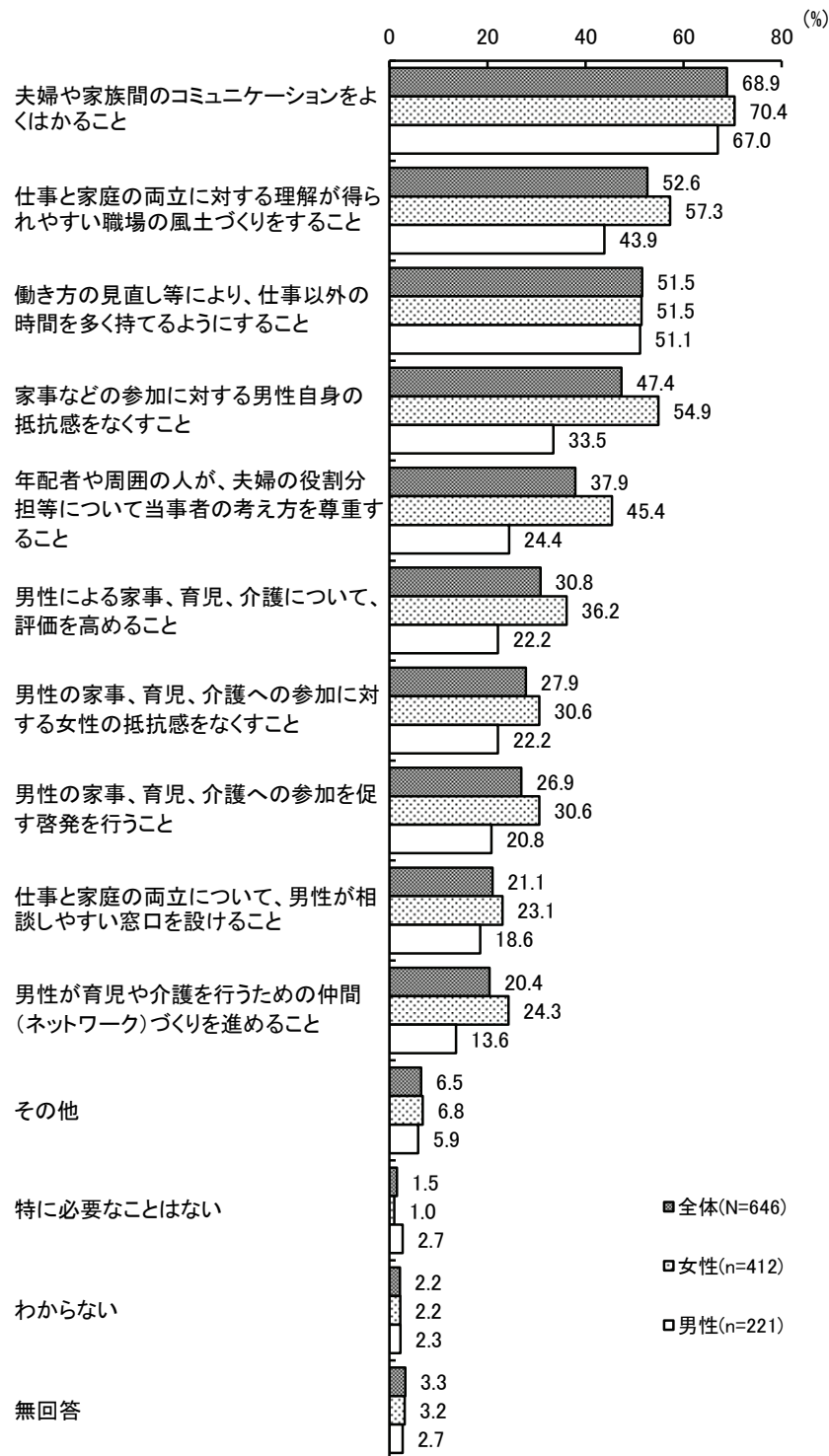
図表 I - 3 - 2 介護の負担感（全体、性別）

<介護を行っている人>

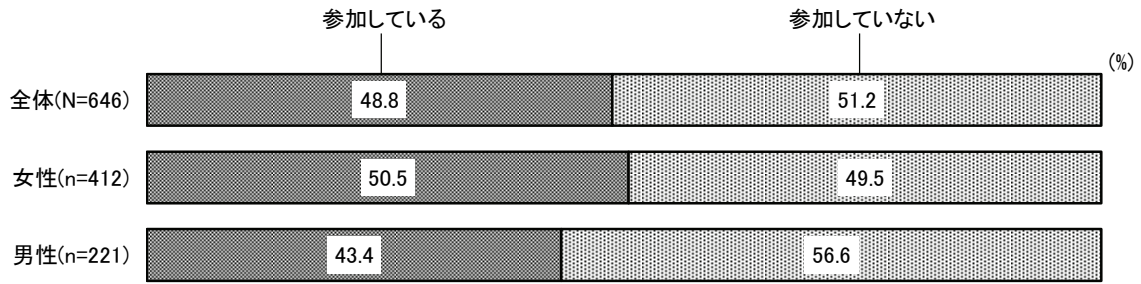




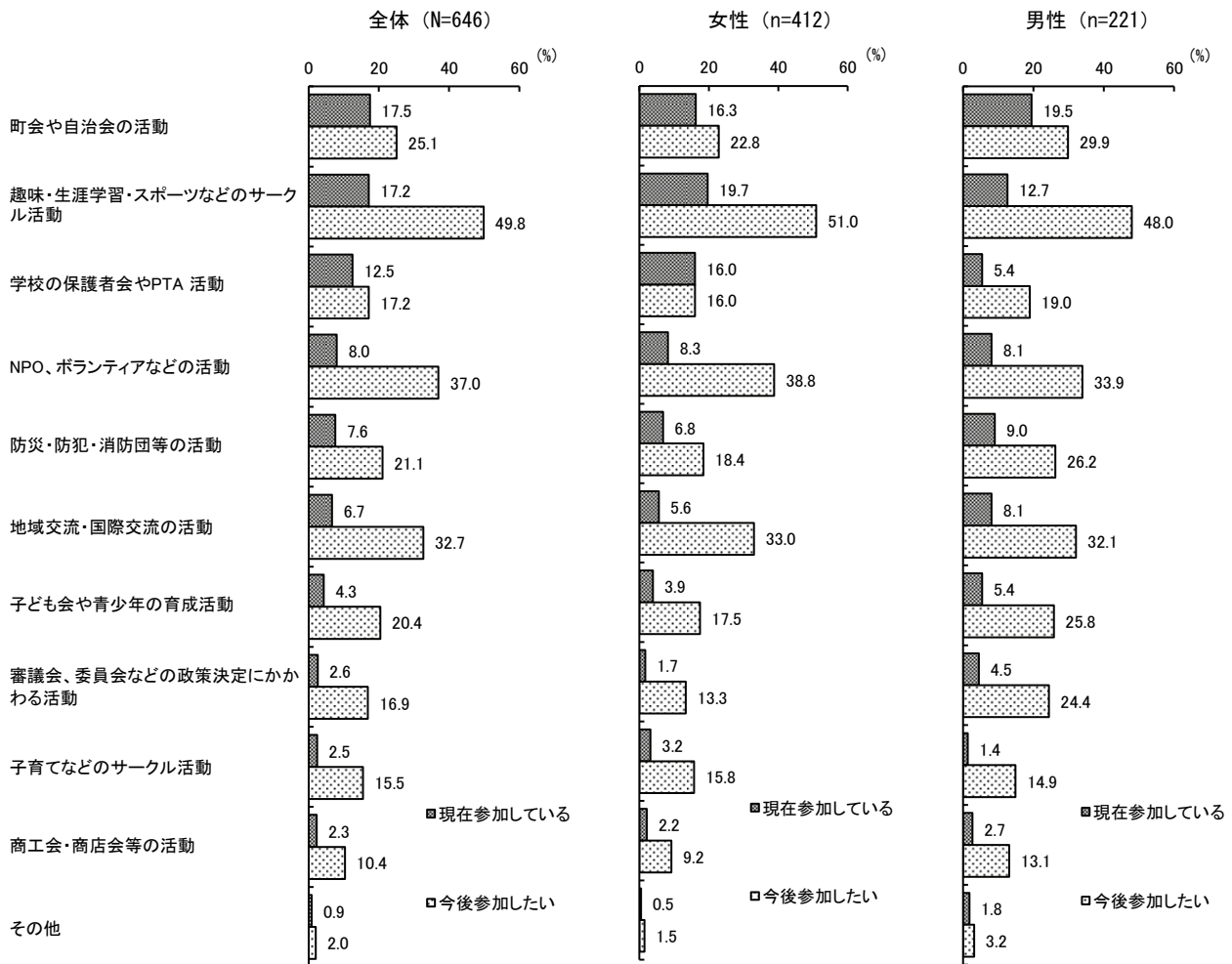
図表 I-3-3 男性が家事・育児・介護に参加するために大切なこと  
(全体、性別:複数回答)



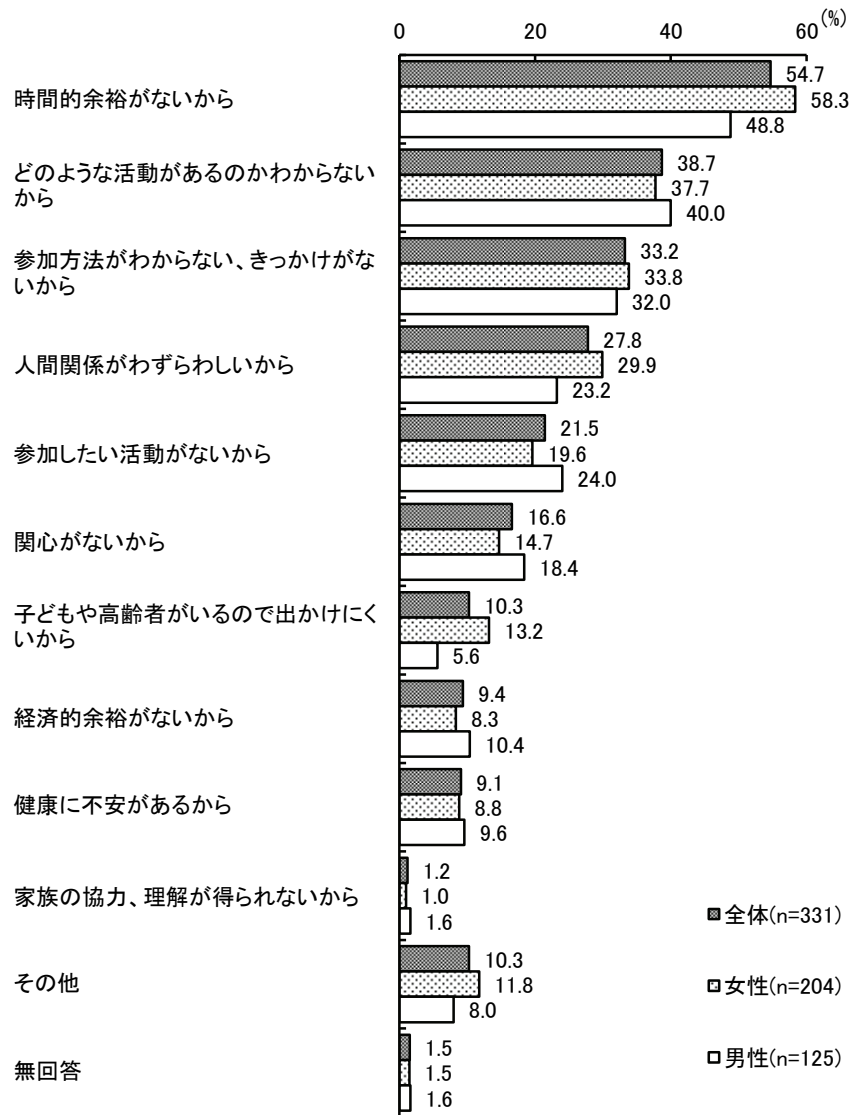
図表Ⅰ－３－４－① 地域活動への参加状況（全体、性別）  
（全体、性別）



図表Ⅲ－３－４－② 地域活動への参加状況・参加意向  
（「参加している」、「参加したい」と回答した割合）（全体、性別）



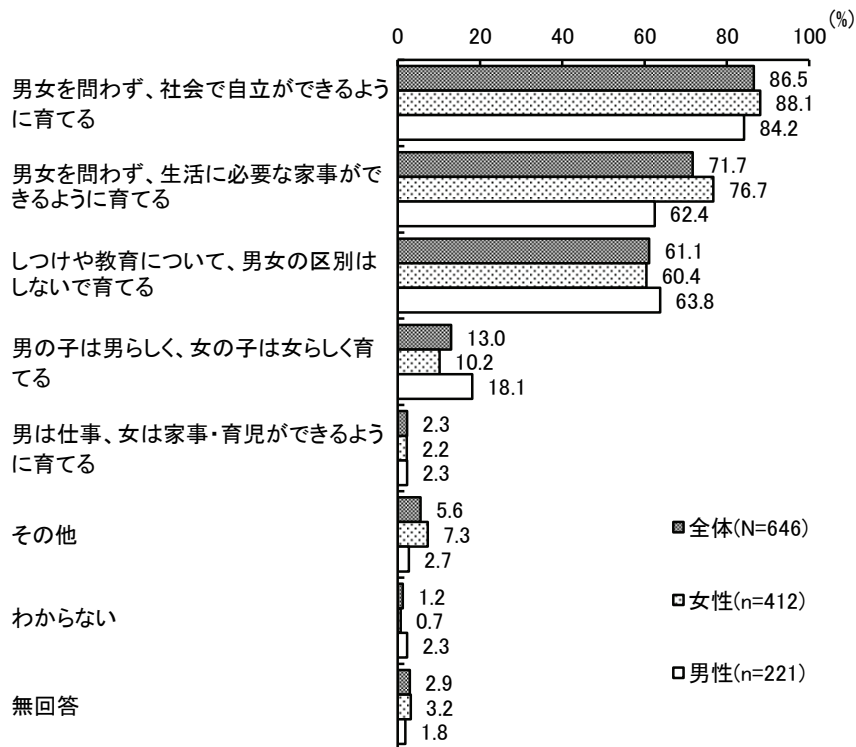
図表 I - 3 - 5 地域活動に参加していない理由（全体、性別：複数回答）  
＜地域活動に現在参加していない人＞



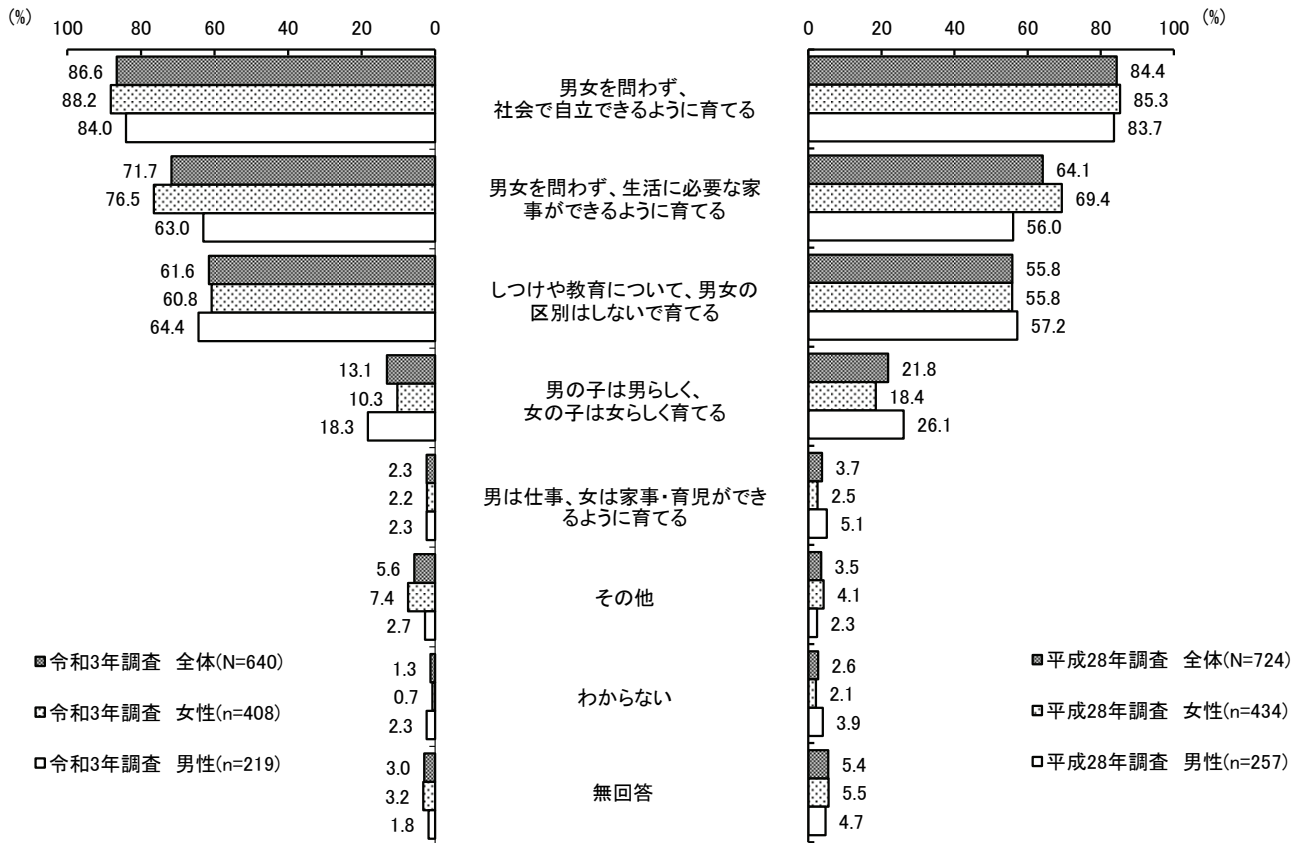
## 4 子育て・教育

- ◆ 望ましいと思う子どもの育て方は、全体では、「男女を問わず、社会で自立ができるように育てる」(86.5%)が最も多く、次いで「男女を問わず、生活に必要な家事ができるように育てる」(71.7%)、「しつけや教育について、男女の区別はしないで育てる」(61.1%)となっている。また、平成28年調査と比較すると、「男の子は男らしく、女の子は女らしく育てる」は21.8%から13.1%と8.7ポイント低くなっている。(図表I-4-1-①、図表I-4-1-②)(問11)
- ◆ 学校教育の中で行われるとよいと思うことは、全体では、「生活指導や進路指導において、性別の区別なく能力を生かせるよう配慮する」(70.6%)が最も多く、次いで「学校生活での児童・生徒の役割分担を性別の区別なく同じにする」(60.5%)、「男女平等の意識を育てる授業をする」(55.1%)となっている。(図表I-4-2)(問12)
- ◆ 子育てをしやすくするために区が進めるべき施策は、全体では、「延長保育、乳児保育、病児・病後児保育など、状況に応じて利用できる多様なサービスの充実」(54.3%)が最も多く、次いで「保育所の増設など、子どもを預けられる施設の充実」(49.8%)、「放課後における子どもの居場所づくり(学童クラブやプレディなど)の充実」(39.5%)となっている。(図表I-4-3)(問13)

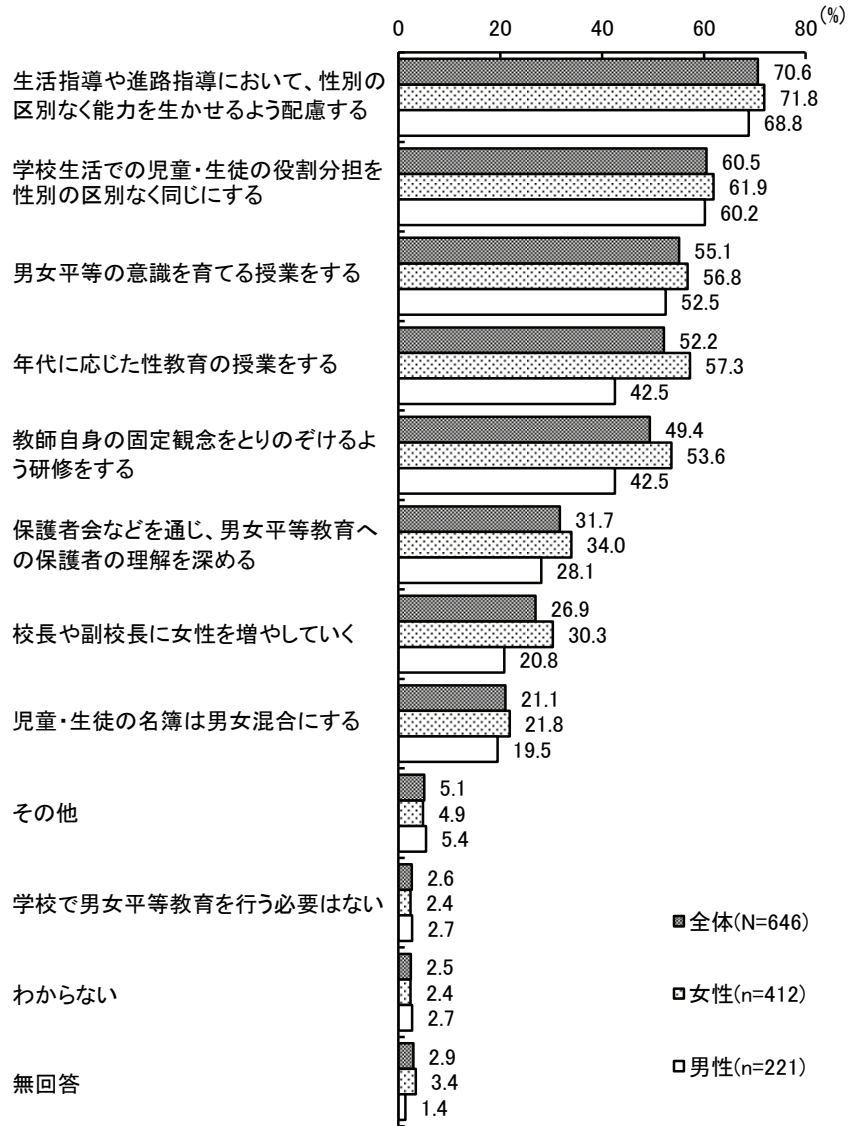
図表I-4-1-① 子育て観(全体、性別:複数回答)



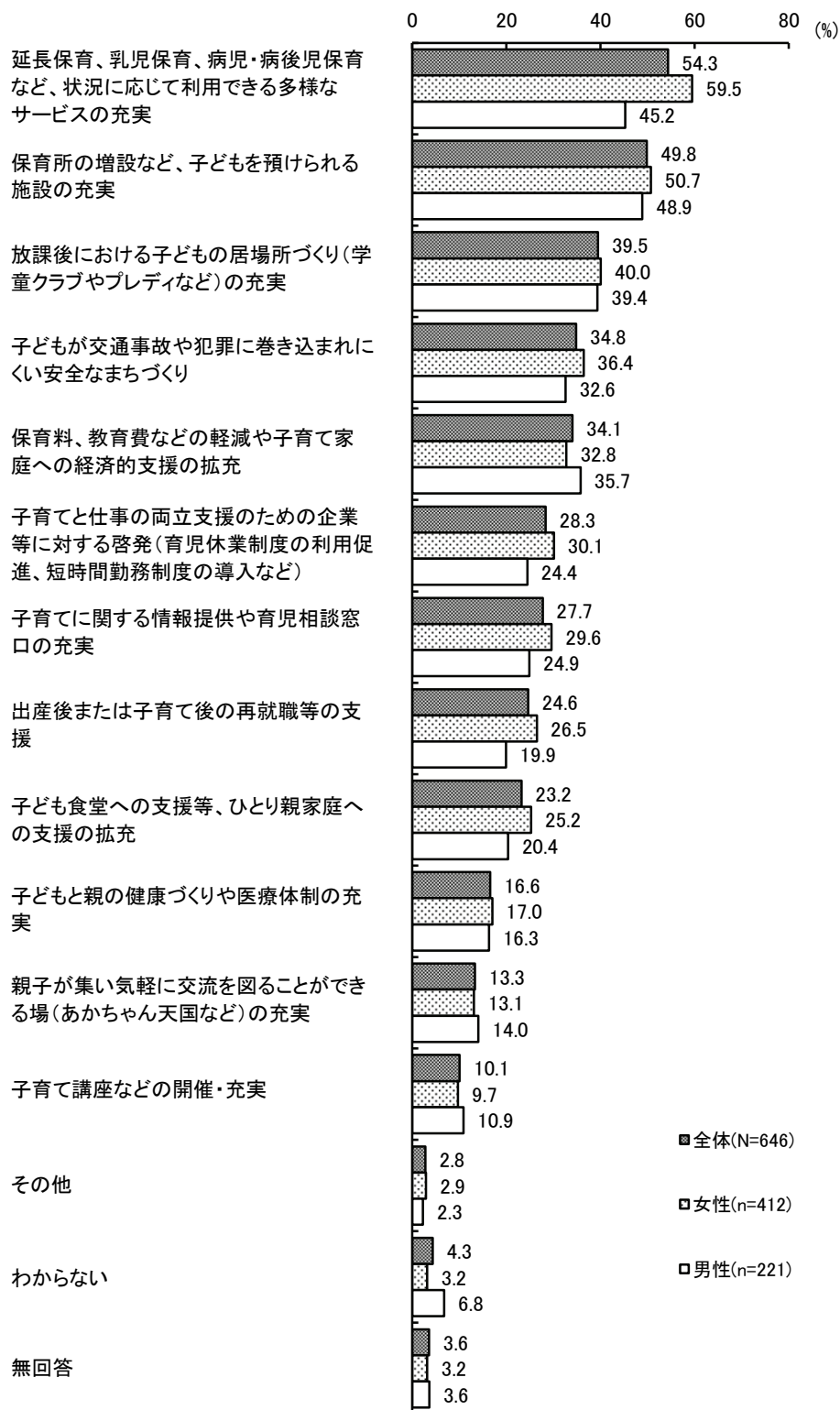
図表 I - 4 - 1 - ② 子育て観（令和3年調査・平成28年調査：全体、性別：複数回答）



図表 I-4-2 学校教育の中で行われるとよいと思うこと  
(全体、性別:複数回答)



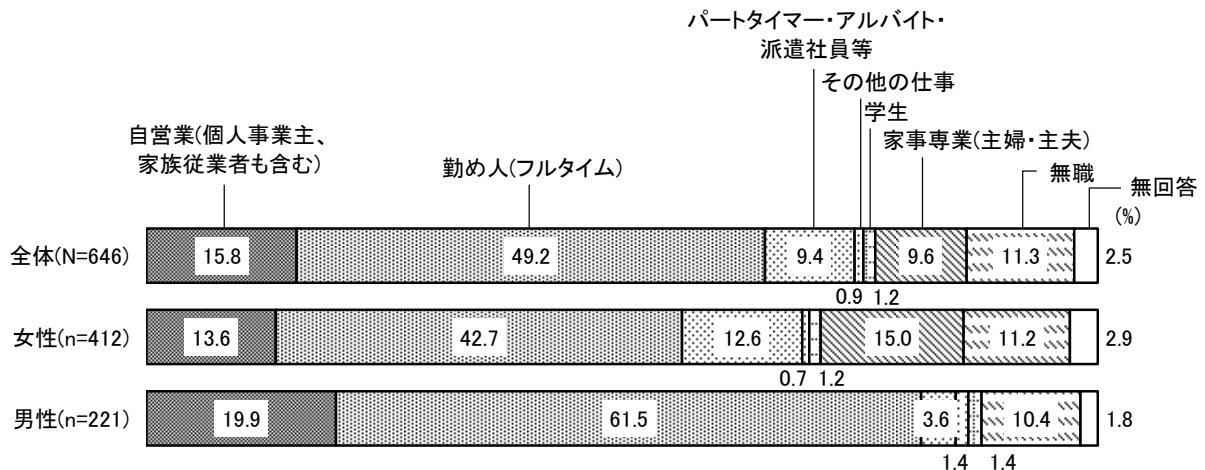
図表 I-4-3 子育てをしやすくするために区が進めるべき施策  
(全体、性別:複数回答)



## 5 働き方

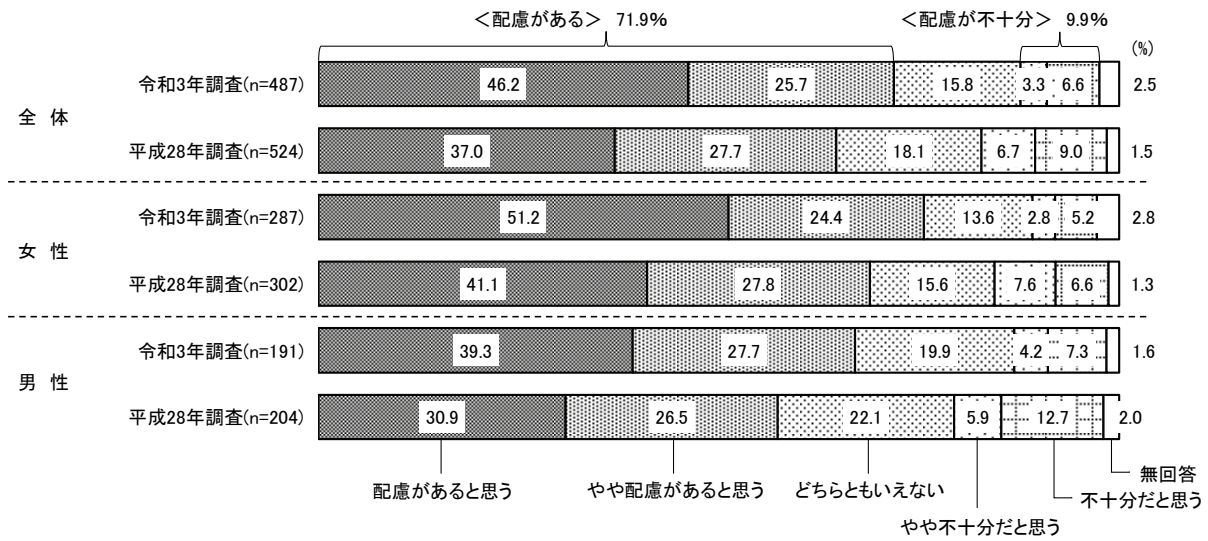
- ◆ 現在の職業は、性別にみると、女性は「勤め人（フルタイム）」（42.7%）が最も多く、「家事専業（主婦・主夫）」（15.0%）、「自営業（個人事業主、家族従業者も含む）」（13.6%）、「パートタイマー・アルバイト・派遣社員等」（12.6%）、「無職」（11.2%）の4項目が10%を超えている。男性は「勤め人（フルタイム）」（61.5%）が最も多く、次いで「自営業（個人事業主、家族従業者も含む）」（19.9%）、「無職」（10.4%）となっている。（図表 I-5-1）（問 14）
- ◆ 職場における仕事と子育て・介護の両立に対する配慮について、現在働いている人にたずねたところ、女性の75.6%、男性の67.0%が「配慮がある」（「配慮があると思う」と「やや配慮があると思う」の合計）と回答しており、その割合は平成28年調査より高くなっている。（図表 I-5-2）（問 14-1）
- ◆ 働いていない人の働いていない理由は、全体では、「高齢で引退をしているから」（52.4%）が最も多くなっている。性別にみると、女性は「育児をしているから」（10.6%）、「介護をしているから」（5.3%）、「家族が賛成していないから」（3.5%）と回答する人がいるが、男性では回答する人はいない。また、「新型コロナウイルス感染症拡大の影響による事業廃止や解雇のため」は、女性が6.2%、男性が3.8%となっている。（図表 I-5-3）（問 14-2）
- ◆ 働いていない人のうち、女性の29.2%、男性の26.9%が「働きたい」と回答している。（図表 I-5-4）（問 14-3）

図表 I-5-1 現在の職業（全体、性別）

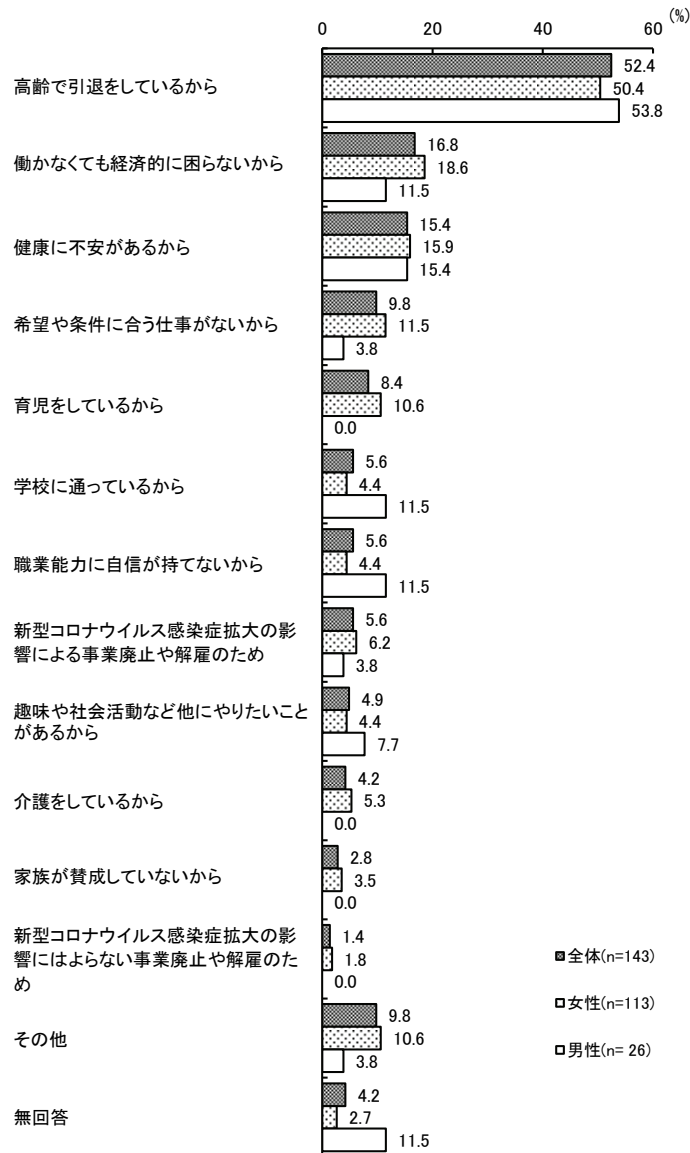




図表 I - 5 - 2 職場における仕事と子育て・介護の両立に対する配慮の有無  
(令和3年調査・平成28年調査:全体、性別) <現在働いている人>

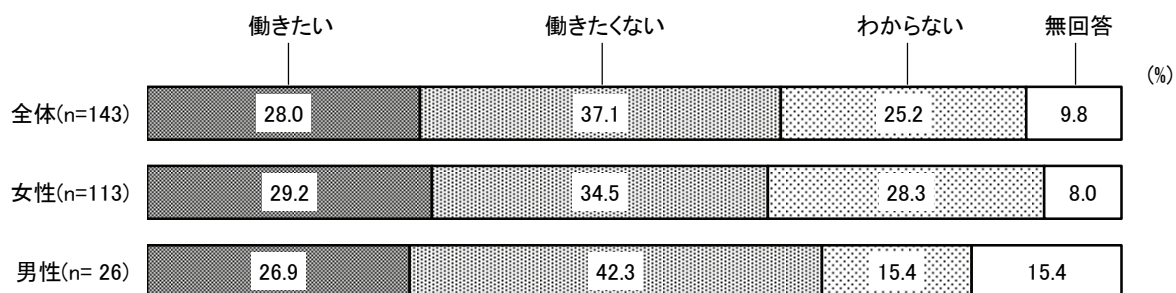


図表 I - 5 - 3 働いていない理由 (全体、性別:複数回答) <現在働いていない人>



図表 I - 5 - 4 今後の就労意向（全体、性別）

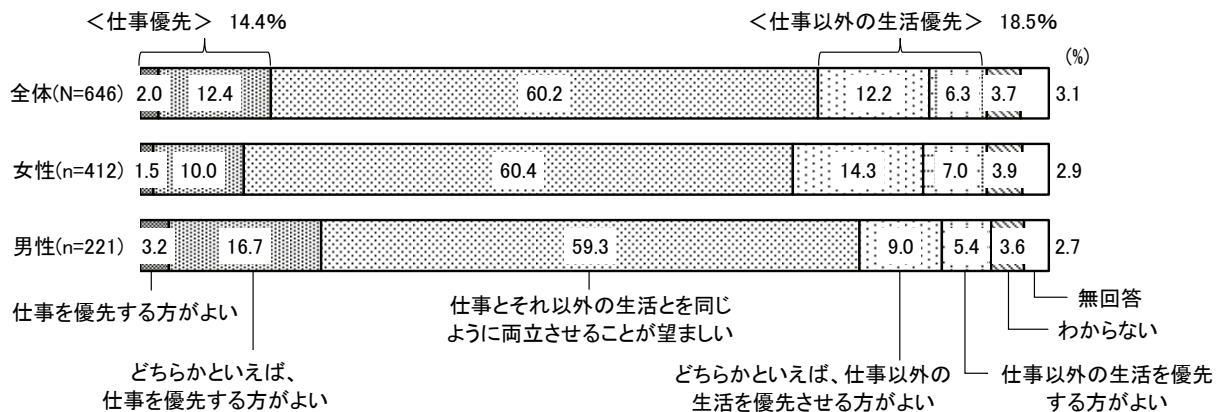
<現在働いていない人>



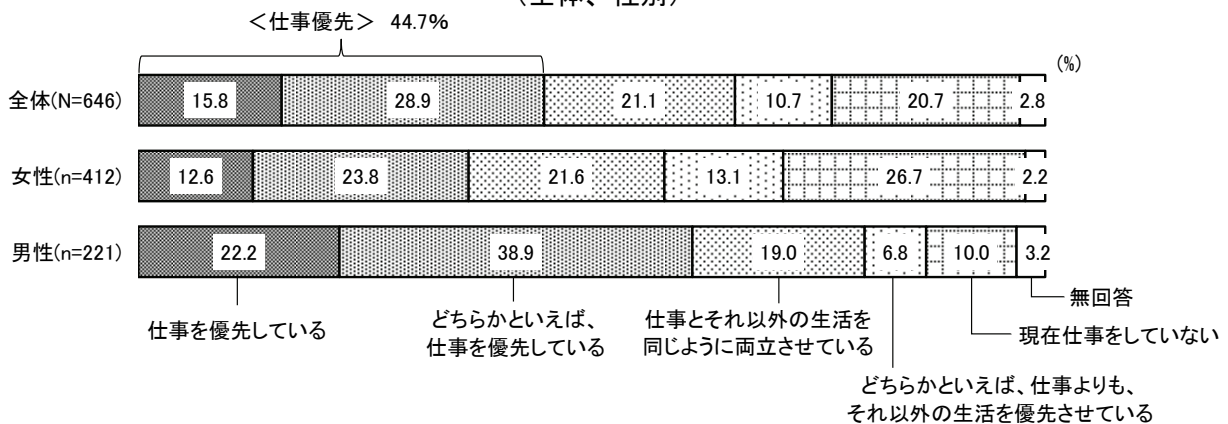
## 6 仕事と生活の調和

- ◆ 仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）の望ましい姿について、全体では、「仕事とそれ以外の生活とを同じように両立させることが望ましい」が 60.2%で最も多くなっている。（問 15）（図表 I - 6 - 1）
- ◆ 仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）の現在の状況について、「仕事とそれ以外の生活を同じように両立させている」は、21.1%であった。また、望ましい姿（問 15）で「仕事とそれ以外の生活とを同じように両立させることが望ましい」と回答した人のうち、現在の状況で「仕事とそれ以外の生活を同じように両立させている」と回答したのは 25.4%であり、4人に1人程度にとどまっている。（問 16）（図表 I - 6 - 2、図表 I - 6 - 3）
- ◆ 仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）を推進するため必要だと思うことは、全体では、「企業がワーク・ライフ・バランスを実現しやすい職場づくりに取り組む」（61.3%）が最も多く、次いで「家族みんなで家事・育児・介護を分担する」（40.4%）、「家事・育児・介護サービスの充実をはかる」（33.4%）となっている。性別にみると、「家族みんなで家事・育児・介護を分担する」（女性:47.8%、男性:27.1%）、「家事・育児・介護サービスの充実をはかる」（女性:40.8%、男性:20.4%）は、男性よりも女性の方が約 20 ポイント高くなっている。（問 17）（図表 I - 6 - 4）

図表 I - 6 - 1 仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）の望ましい姿  
（全体、性別）



図表 I - 6 - 2 仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）の現在の状況  
（全体、性別）

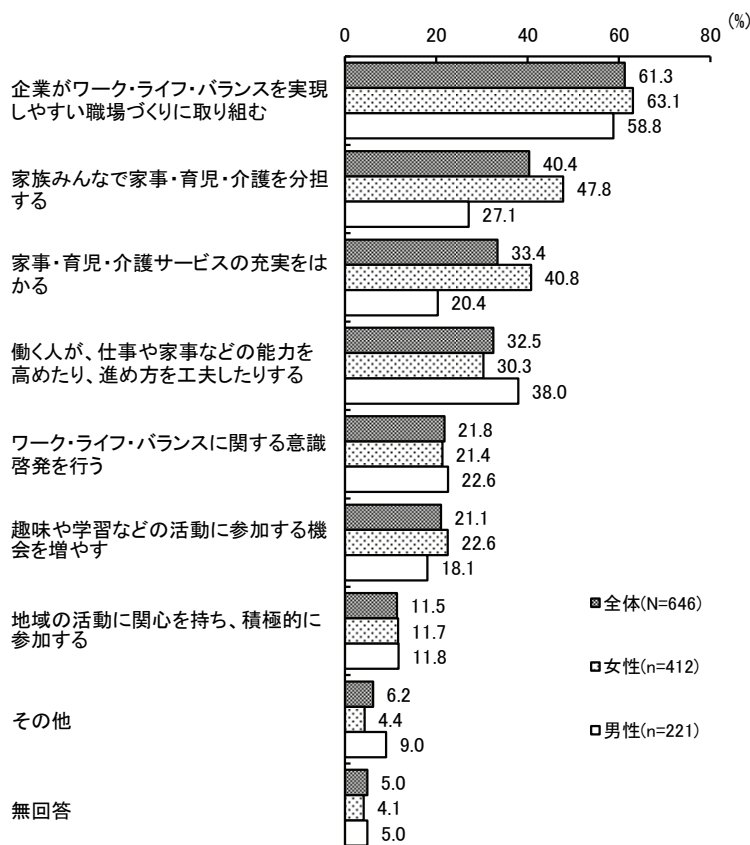


図表 I - 6 - 3 仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）の現在の状況  
（全体、ワーク・ライフ・バランスの望ましい姿別）

[上段:実数、下段:%]

		仕事を優先している	どちらかといえば、仕事を優先している	仕事とそれ以外の生活とを同じように両立させている	どちらかといえば、仕事を優先している	現在仕事をしていない	無回答
全	体 (N=646)	102	187	136	69	134	18
		100.0	28.9	21.1	10.7	20.7	2.8
ワーク・ライフ・バランスの望ましい姿別	仕事を優先する方がよい (n=13)	9	0	1	1	2	0
		100.0	69.2	7.7	7.7	15.4	0.0
	どちらかといえば、仕事を優先する方がよい (n=80)	20	41	4	1	13	1
		100.0	25.0	51.3	5.0	1.3	16.3
	仕事とそれ以外の生活とを同じように両立させることが望ましい (n=389)	57	122	99	31	79	1
		100.0	14.7	31.4	25.4	8.0	20.3
	どちらかといえば、仕事以外の生活を優先させる方がよい (n=79)	8	15	21	24	11	0
	100.0	10.1	19.0	26.6	30.4	13.9	
仕事以外の生活を優先する方がよい (n=41)	7	8	5	11	10	0	
	100.0	17.1	19.5	12.2	26.8	24.4	
わからない (n=24)	0	1	5	1	15	2	
	100.0	0.0	4.2	20.8	4.2	62.5	

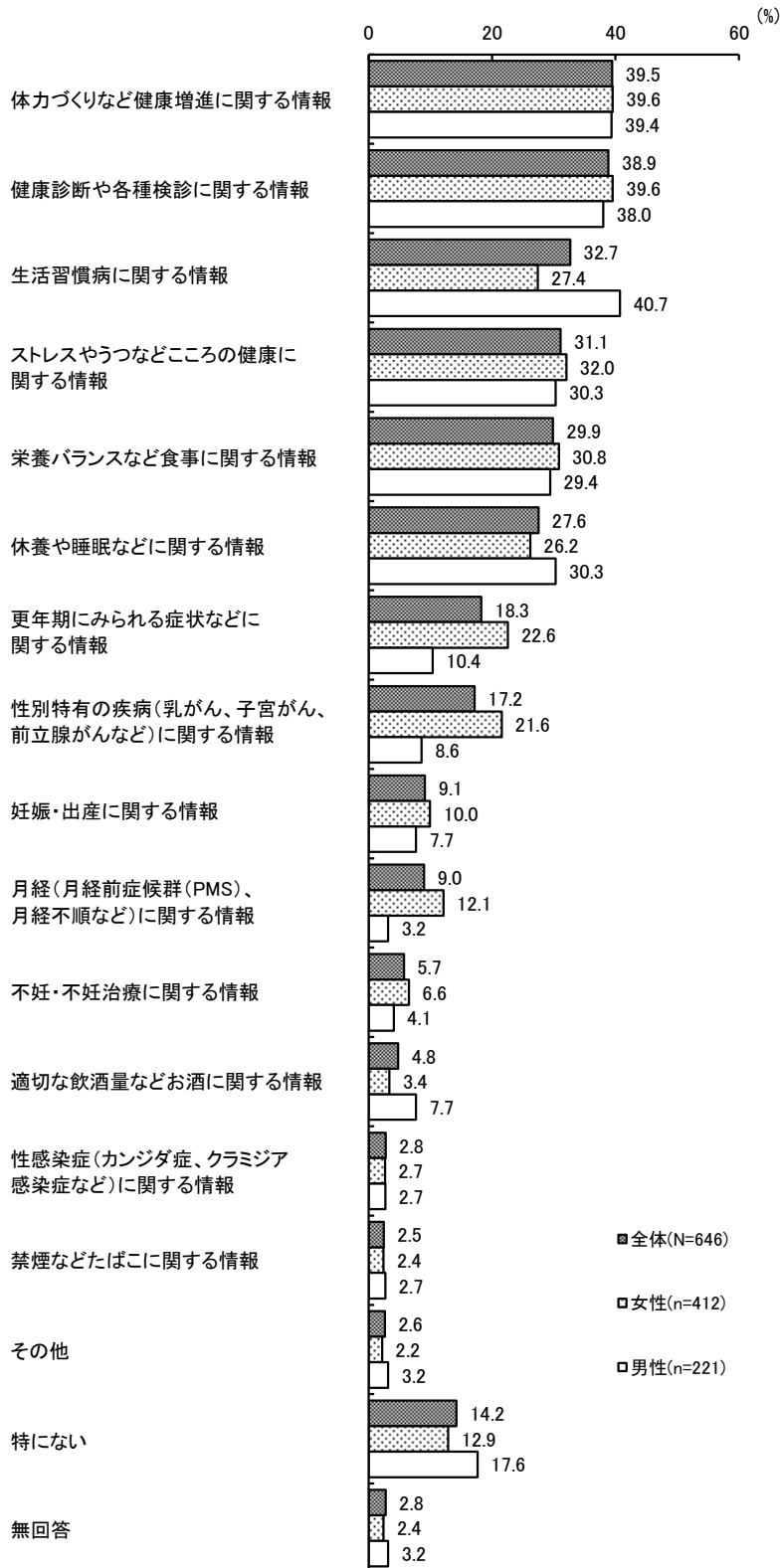
図表 I - 6 - 4 仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）を推進するために必要なこと  
（全体、性別：複数回答）



## 7 健康・人権

- ◆ 健康に関する欲しい情報は、性別にみると、女性は「体力づくりなど健康増進に関する情報」（39.6%）と「健康診断や各種検診に関する情報」（39.6%）が同率で最も多く、男性は「生活習慣病に関する情報」（40.7%）が最も多くなっている。また、女性は「更年期にみられる症状などに関する情報」（女性:22.6%、男性:10.4%）、「性別特有の疾病（乳がん、子宮がん、前立腺がんなど）に関する情報」（女性:21.6%、男性:8.6%）で、男性より10ポイント以上高くなっている。性・年代別にみると、健康に関する欲しい情報は性・年代で異なることが分かる。（図表 I-7-1-①、図表 I-7-1-②）（問 18）
- ◆ 配偶者暴力防止法について、全体では、「法律があることは知っているが、内容はよく知らない」（52.6%）が半数を超え、「法律があることも、その内容も知っている」（23.7%）、「法律があることを知らなかった」（21.8%）がともに20%台となっている。「法律があることも、その内容も知っている」の割合は、平成28年調査より高くなっている。（図表 I-7-2-①、図表 I-7-2-②）（問 19）
- ◆ 女性の14.6%、男性の7.2%が配偶者・恋人などから何らかの暴力を受けた経験がある。その割合は平成28年調査より高くなっている。（図表 I-7-3-①、図表 I-7-3-②）（問 20）
- ◆ 全体では、暴力を受けた人の50.6%が誰にも相談をしていない。その割合は、性別にみると、女性は46.7%、男性は68.8%となっている。相談先では、友人・知人や親族が多く、公的機関の相談窓口を利用している人は少ない。（図表 I-7-4）（問 20-1）
- ◆ 相談しなかった理由は、全体では、「相談しても無駄だと思ったから」（43.6%）が最も多く、次いで「相談するほどのことではないと思ったから」（41.0%）、「人に打ち明けることに抵抗があったから」（33.3%）となっている。（図表 I-7-5）（問 20-2）
- ◆ ドメスティック・バイオレンス（DV）について、全体では、「親族・友人・知人から相談を受けたことがある」が7.9%、「親族・友人・知人に暴力を受けた当事者がいる」が15.8%、「親族・友人・知人に当事者はいないが、見聞きしたことがある」が36.1%となっている。なお、「見聞きしたことがない」が40.7%であり、「無回答」（3.4%）と合計しても44.1%であるため、それ以外の55.9%がドメスティック・バイオレンス（DV）を見聞きしたことがある。（図表 I-7-6）（問 21）
- ◆ 配偶者や恋人などの間で起きる暴力を防止するために必要だと思うことは、全体では、「被害者が早期に相談できるよう、身近な相談窓口を増やす」（71.5%）が最も多く、次いで「加害者への罰則を強化する」（57.0%）、「学校・大学で児童・生徒・学生に対し、暴力を防止するための教育を行う」（43.3%）となっている。なお、「被害者が早期に相談できるよう、身近な相談窓口を増やす」（令和3年:71.4%、平成28年:57.2%）は、平成28年調査から14.2ポイント高くなっている。（図表 I-7-7-①、図表 I-7-7-②）（問 22）

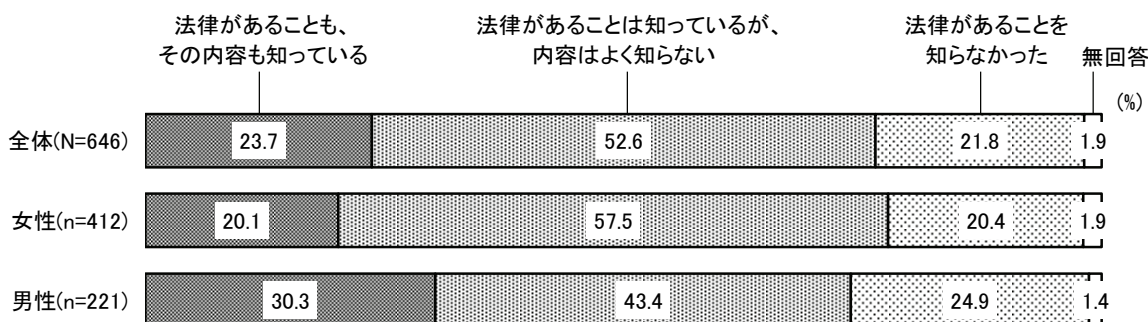
図表 I-7-1-① 健康に関する欲しい情報（全体、性別：複数回答）



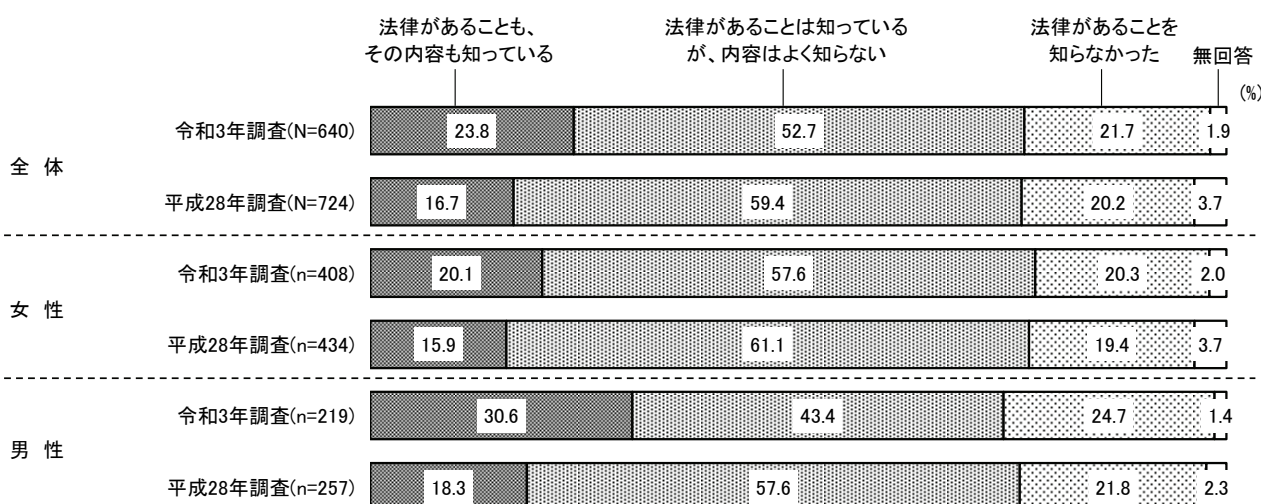
図表 I - 7 - 1 - ② 健康に関する欲しい情報（性・年代別：複数回答）（上位 1 項目）

		女性	男性	
20代	(n=22)	妊娠・出産に関する情報 45.5%	(n=14)	ストレスやうつなどこころの健康に関する情報 50.0%
30代	(n=68)	性別特有の疾病(乳がん、子宮がん、前立腺がんなど)に関する情報、健康診断や各種検診に関する情報 35.3%	(n=33)	休養や睡眠などに関する情報 54.5%
40代	(n=104)	更年期にみられる症状などに関する情報 41.3%	(n=51)	健康診断や各種検診に関する情報 41.2%
50代	(n=93)	体力づくりなど健康増進に関する情報 47.3%	(n=38)	健康診断や各種検診に関する情報、生活習慣病に関する情報 44.7%
60代	(n=47)	体力づくりなど健康増進に関する情報 61.7%	(n=42)	生活習慣病に関する情報 45.2%
70代	(n=48)	体力づくりなど健康増進に関する情報 41.7%	(n=25)	生活習慣病に関する情報、体力づくりなど健康増進に関する情報 48.0%
80代以上	(n=25)	健康診断や各種検診に関する情報、ストレスやうつなどこころの健康に関する情報 36.0%	(n=16)	健康診断や各種検診に関する情報、栄養バランスなど食事に関する情報 25.0%

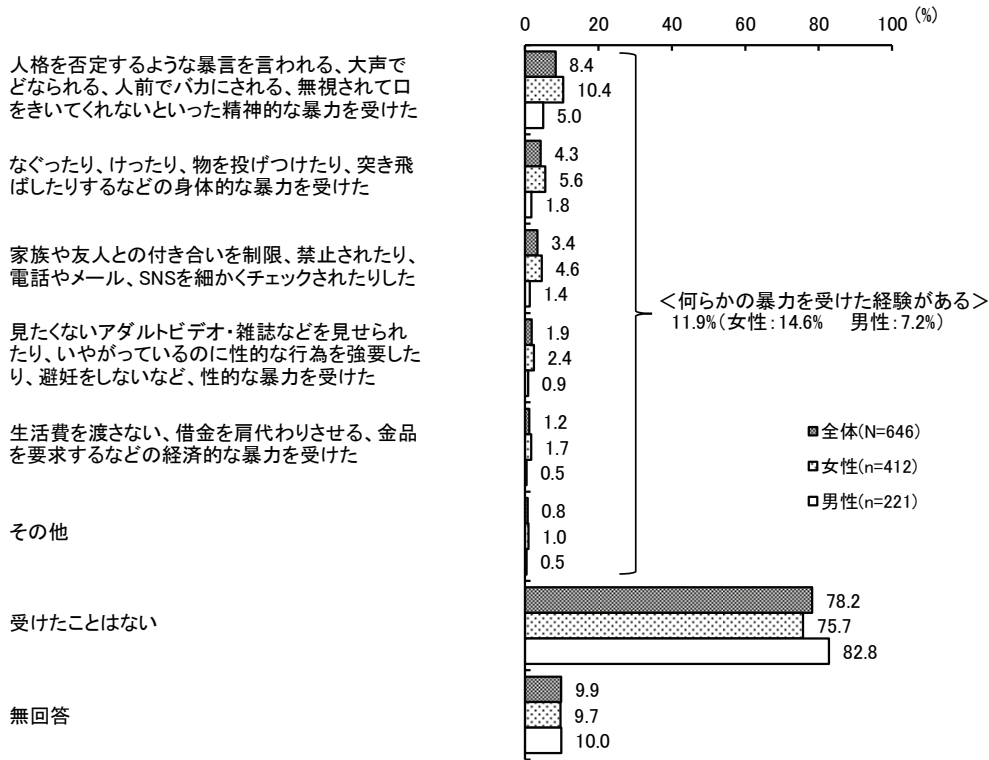
図表 I - 7 - 2 - ① 配偶者暴力防止法の認知度（全体、性別）



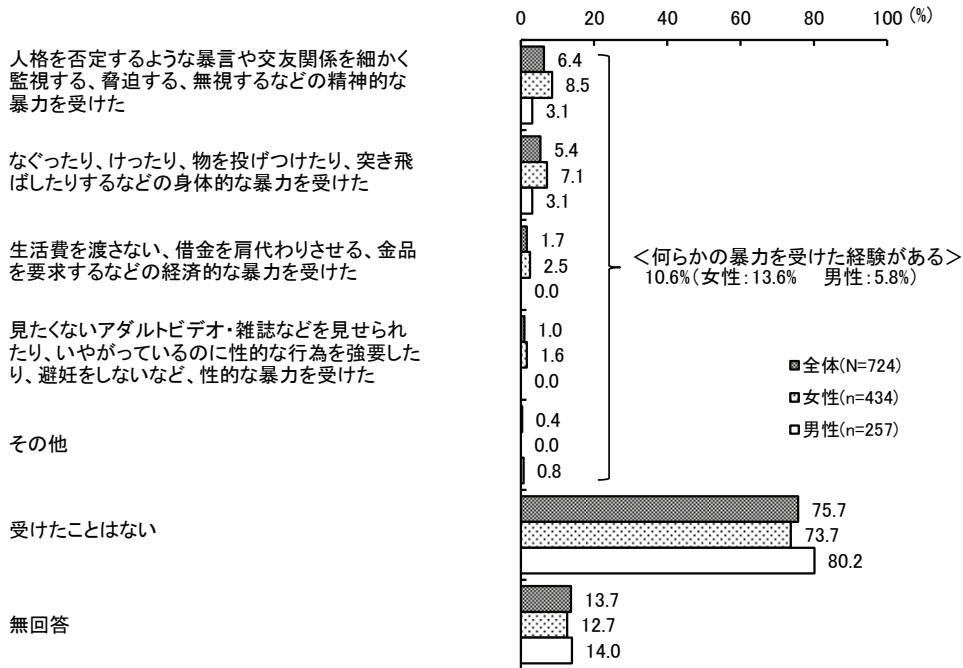
図表 I - 7 - 2 - ② 配偶者暴力防止法の認知度（令和 3 年調査・平成 28 年調査：全体、性別）



図表 I - 7 - 3 - ① 配偶者・恋人などから暴力を受けた経験の有無  
(令和3年調査:全体、性別:複数回答)



図表 I - 7 - 3 - ② 配偶者・恋人などから暴力を受けた経験の有無  
(平成28年調査:全体、性別:複数回答)

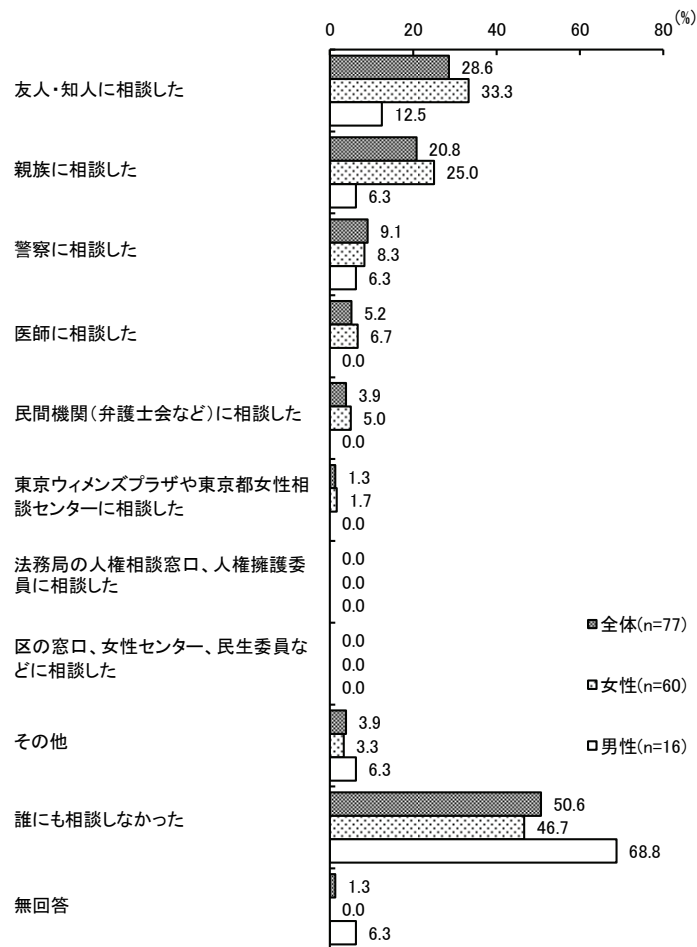


※令和3年調査の「18・19歳」を除いた n=640 の場合の<何らかの暴力を受けた経験がある>は、全体:12.0%、女性:14.7%、男性:7.3%である。

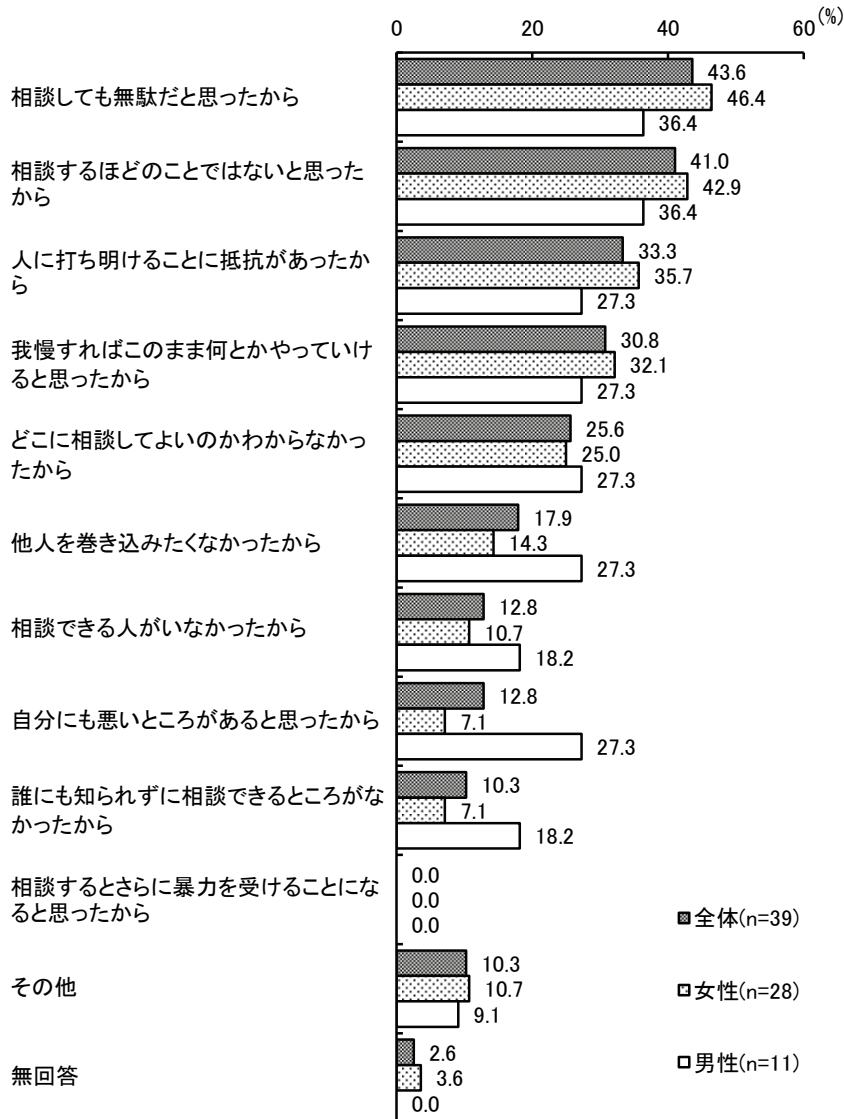


図表 I-7-4 受けた暴力についての相談先（全体、性別：複数回答）

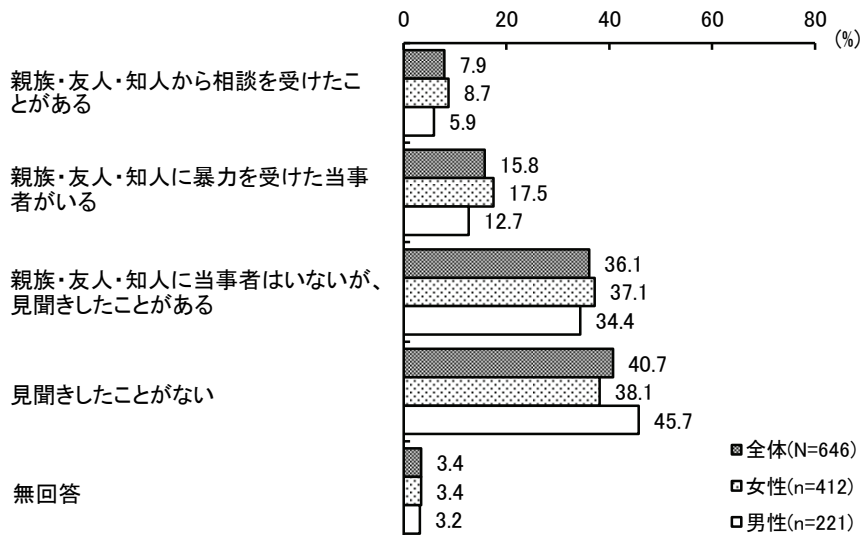
＜暴力を受けた経験がある人＞



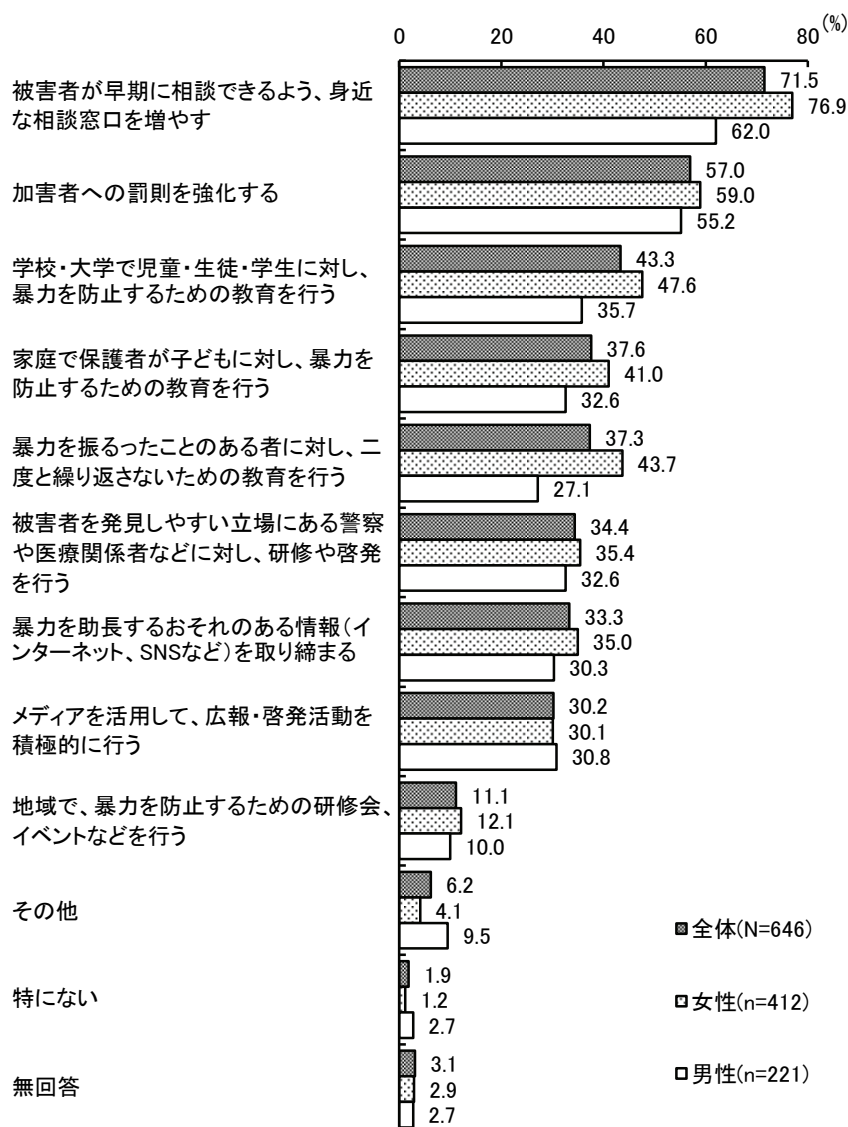
図表 I-7-5 誰にも相談しなかった理由（全体、性別：複数回答）  
＜暴力を受けた経験があり誰にも相談しなかった人＞



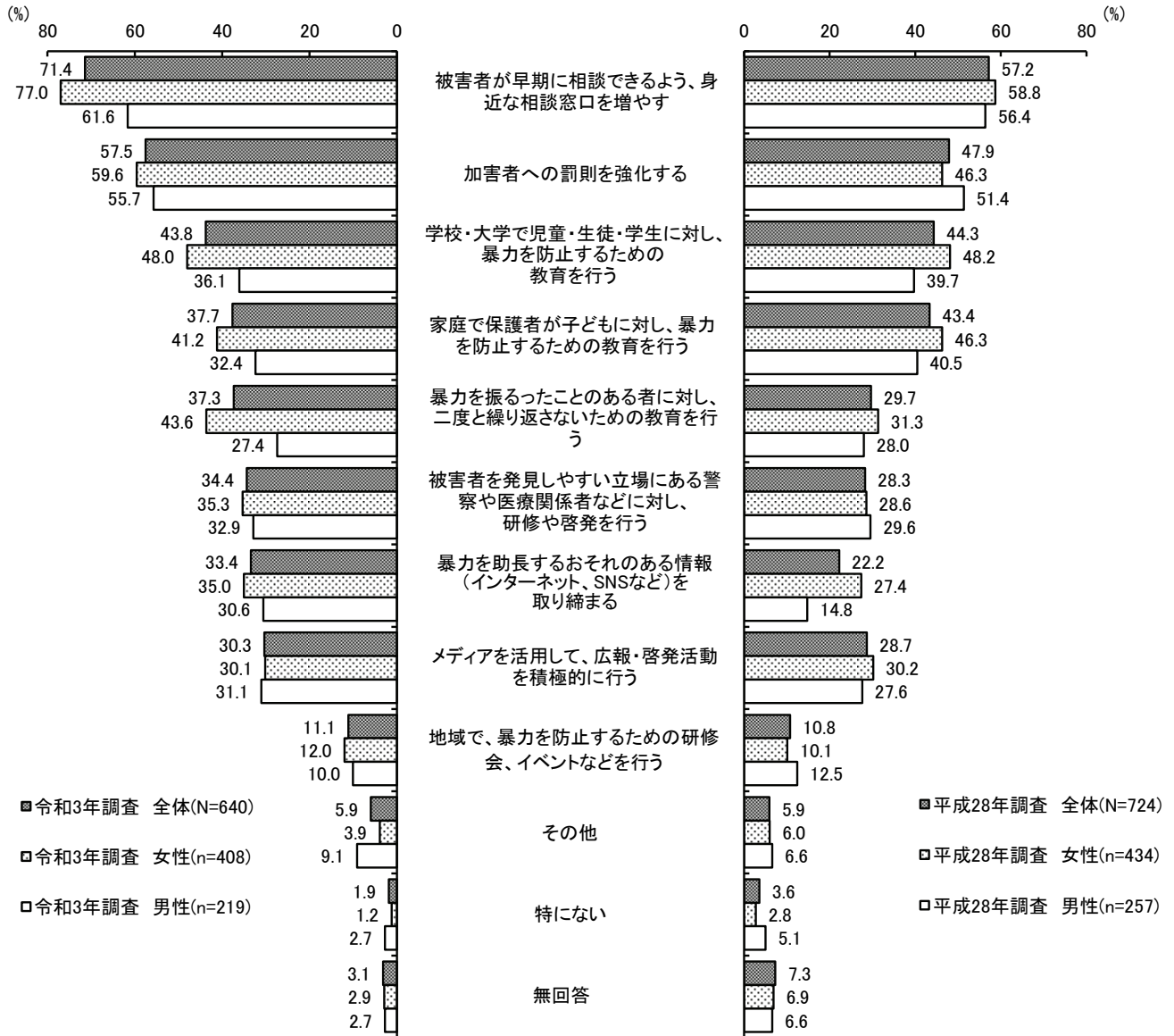
図表 I-7-6 ドメスティック・バイオレンス（DV）について見聞きしたことがあるか（全体、性別：複数回答）



図表 I-7-7-① 配偶者や恋人などの間で起きる暴力を防止するために必要だと思うこと  
(全体、性別:複数回答)



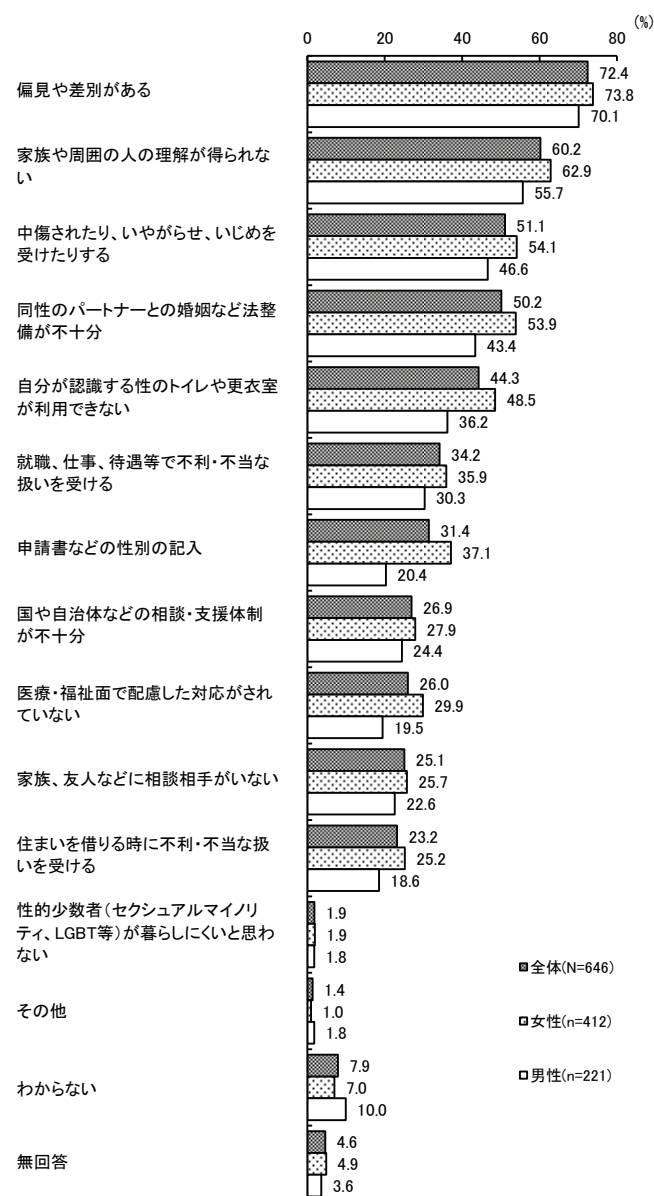
図表 I-7-7-② 配偶者や恋人などの間で起きる暴力を防止するために必要だと思うこと  
(令和3年調査・平成28年調査:全体、性別:複数回答)



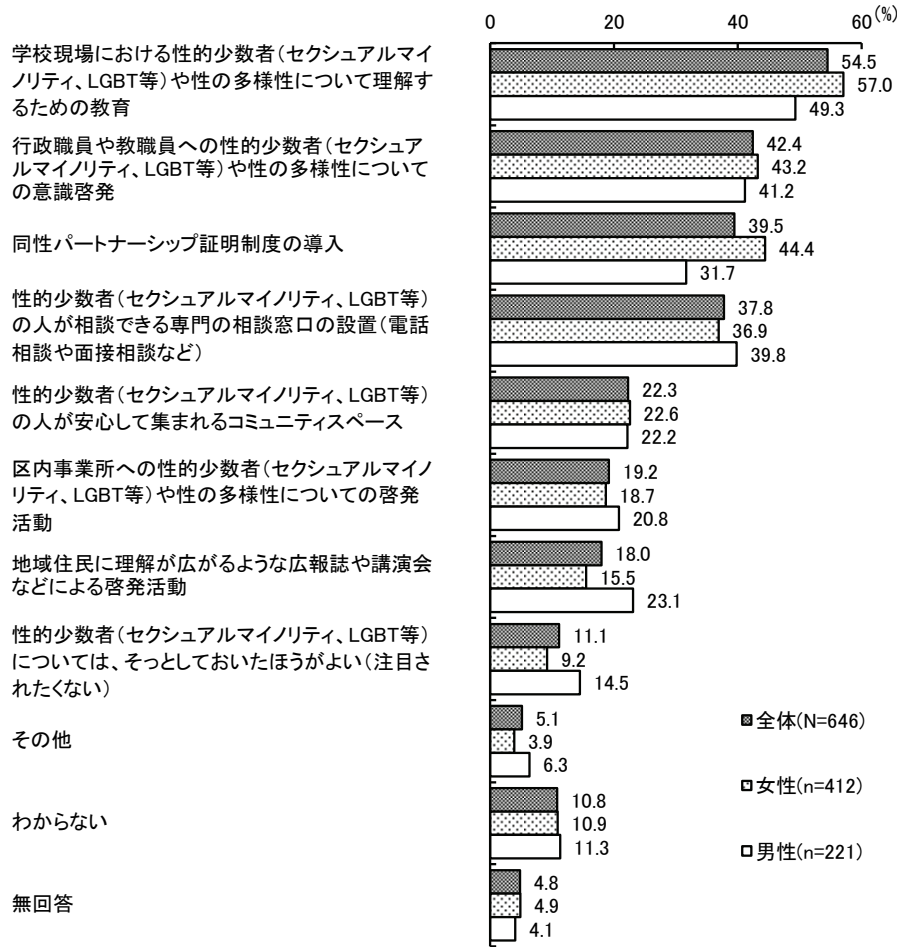
## 8 性的少数者、LGBT等

- ◆ 性的少数者（セクシュアルマイノリティ、LGBT等）が暮らしにくさを感じる点だと思うことでは、全体では、「偏見や差別がある」が72.4%で最も多く、次いで「家族や周囲の人の理解が得られない」（60.2%）、「中傷されたり、いやがらせ、いじめを受けたりする」（51.1%）となっている。（図表I-8-1）（問23）
- ◆ 性的少数者（セクシュアルマイノリティ、LGBT等）をはじめ、すべての人の性の多様性が認め合える社会をつくるために、区に期待する施策は、全体では、「学校現場における性的少数者（セクシュアルマイノリティ、LGBT等）や性の多様性について理解するための教育」（54.5%）が最も多く、次いで「行政職員や教職員への性的少数者（セクシュアルマイノリティ、LGBT等）や性の多様性についての意識啓発」（42.4%）、「同性パートナーシップ証明制度の導入」（39.5%）となっている。（図表I-8-2）（問24）

図表I-8-1 性的少数者（セクシュアルマイノリティ、LGBT等）が暮らしにくさを感じる点だと思うこと（全体、性別：複数回答）



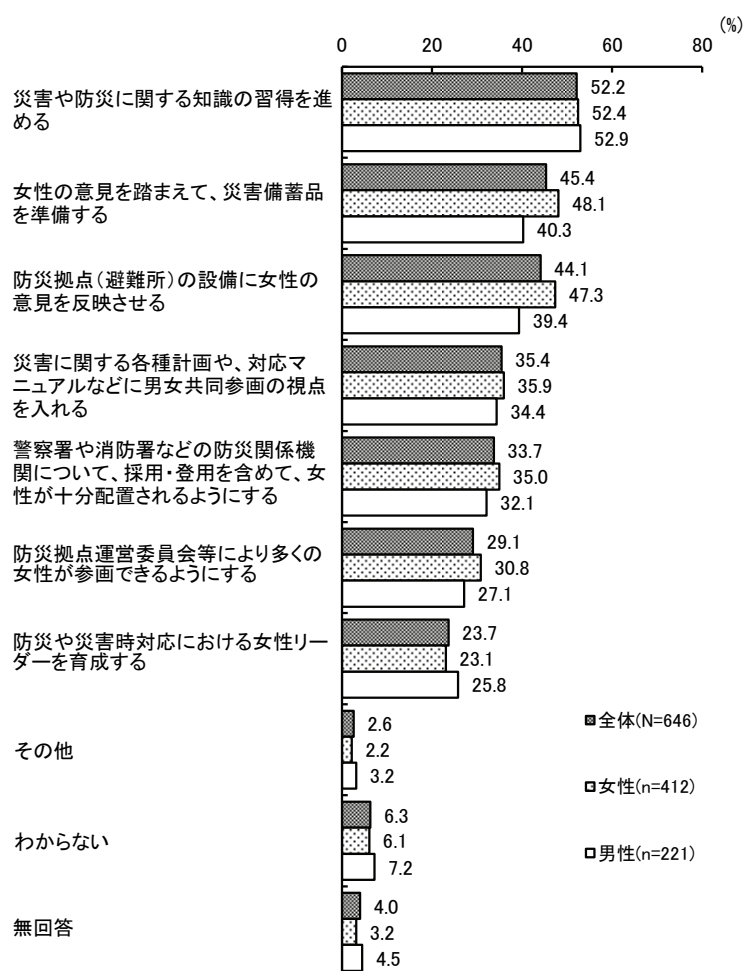
図表 I-8-2 すべての人の性の多様性が認め合える社会をつくるために区に期待する施策  
(全体、性別:複数回答)



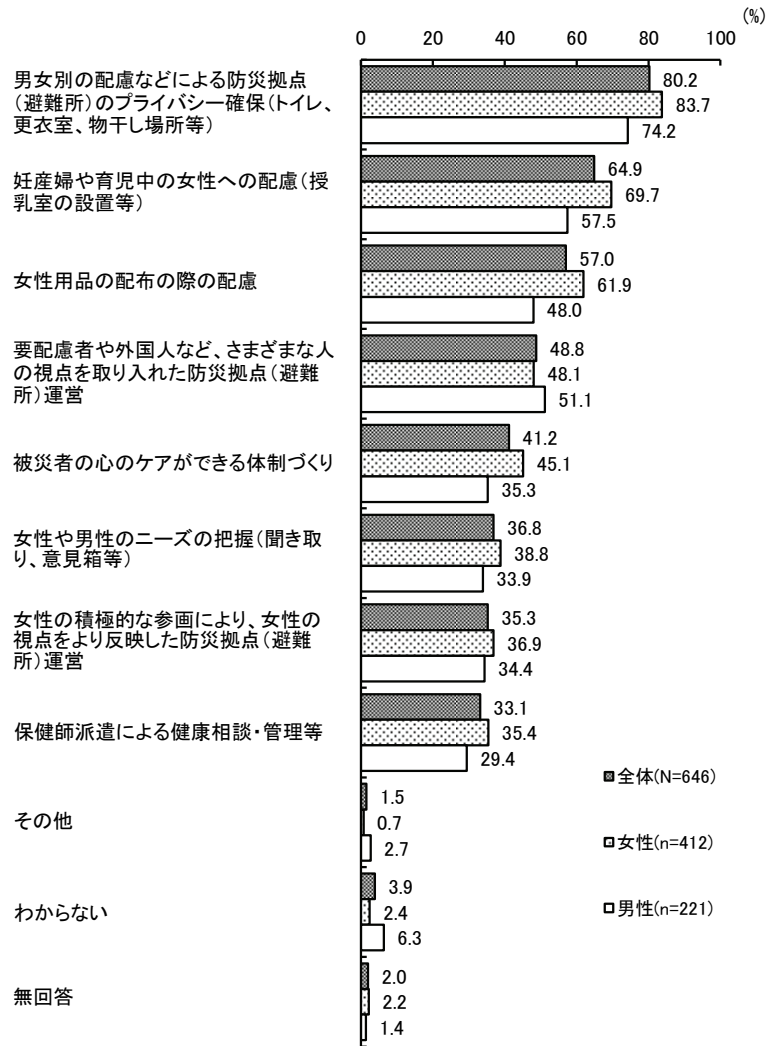
## 9 防災

- ◆ 地域における防災対策において特に重要なことは、全体では、「災害や防災に関する知識の習得を進める」(52.2%)が最も多く、次いで「女性の意見を踏まえて、災害備蓄品を準備する」(45.4%)、「防災拠点(避難所)の設備に女性の意見を反映させる」(44.1%)となっている。(図表 I-9-1) (問 25)
- ◆ 防災拠点(避難所)の運営において男女共同参画の視点に配慮して取り組む必要があると思うことは、全体では、「男女別の配慮などによる防災拠点(避難所)のプライバシー確保(トイレ、更衣室、物干し場所等)」(80.2%)が最も多く、次いで「妊産婦や育児中の女性への配慮(授乳室の設置等)」(64.9%)、「女性用品の配布の際の配慮」(57.0%)となっている。(図表 I-9-2) (問 26)

図表 I-9-1 地域の防災対策において重要なこと(全体、性別:複数回答)



図表 I - 9 - 2 防災拠点（避難所）の運営において男女共同参画の視点に配慮して  
取り組む必要があること（全体、性別：複数回答）

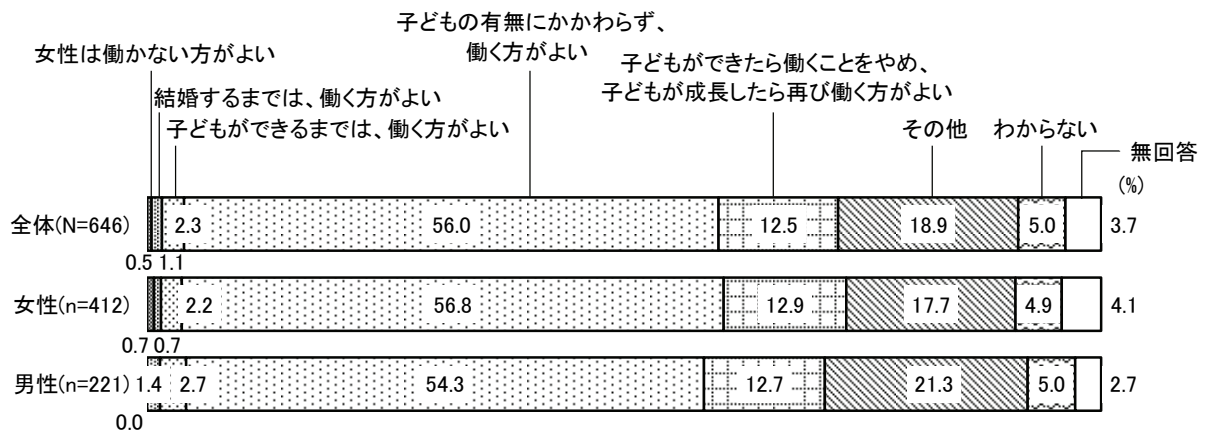




## 10 女性の活躍推進

- ◆ 女性が働くことについて、全体では、「子どもの有無にかかわらず、働く方がよい」（56.0%）という就業継続型の割合が最も高くなっている。また、「子どもができたら働くことをやめ、子どもが成長したら再び働く方がよい」（12.5%）という中断再就職型の割合は「その他」（18.9%）に次いで高くなっている。平成28年調査と比較すると、就業継続型の割合は高く、中断再就職型の割合は低くなっている。（図表Ⅰ-10-1-①、図表Ⅰ-10-1-②）（問27）
- ◆ 女性が出産・育児・介護により離職せずに同じ職場で働き続けるために、家庭・社会・職場において必要なことは、全体では、「保育所や学童クラブなど、子どもを預けられる環境の整備」（78.3%）が最も多く、次いで「職場における上司、管理職、同僚の理解と意識改革」（59.0%）、「短時間勤務制度や在宅勤務制度などの導入」（56.5%）となっている。（図表Ⅰ-10-2）（問28）
- ◆ 子育てや介護によりいったん離職した女性が再就職や起業にチャレンジするために必要なことは、全体では、「個別の状況に応じた柔軟な勤務形態（在宅勤務や短時間勤務など）の導入」（53.1%）が最も多く、次いで「再就職や起業を目指す人に対する子育て支援、保育サービス等の充実」（51.4%）、「再就職希望者への情報提供」（49.7%）となっている。（図表Ⅰ-10-3）（問29）

図表Ⅲ-10-1-① 女性が働くことに対する考え（全体、性別）



\* 「女性が働くこと」については、次の5タイプを想定して質問を行っている

「子どもの有無にかかわらず、働く方がよい」（就業継続型）

「結婚するまでは、働く方がよい」（結婚退職型）

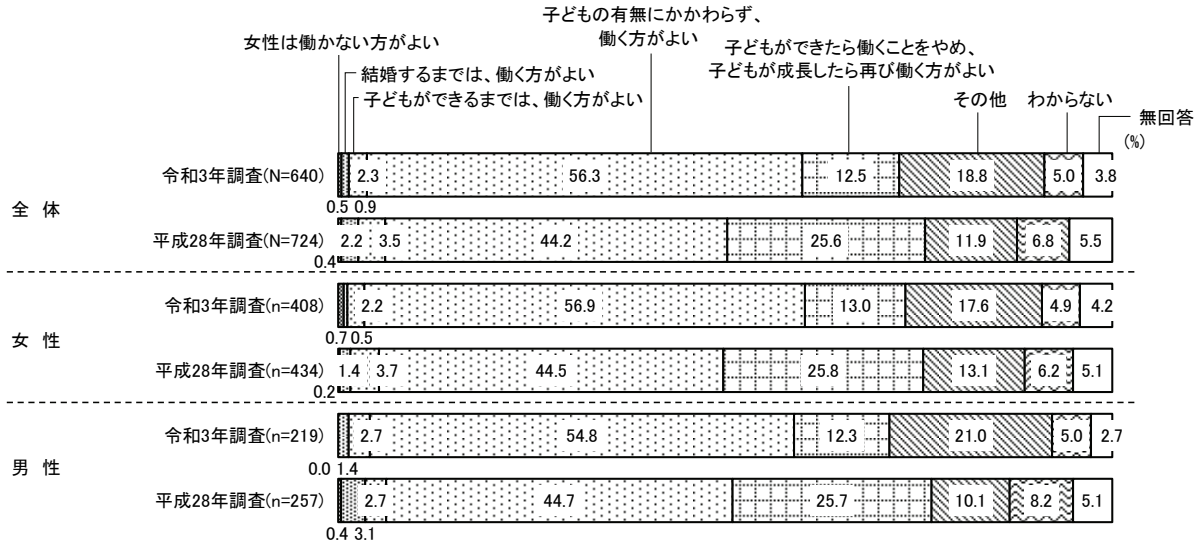
「子どもができるまでは、働く方がよい」（出産退職型）

「子どもの有無にかかわらず働く方がよい」（職業継続型）

「子どもができたら働くことをやめ、子どもが成長したら再び働く方がよい」（中断再就職型）

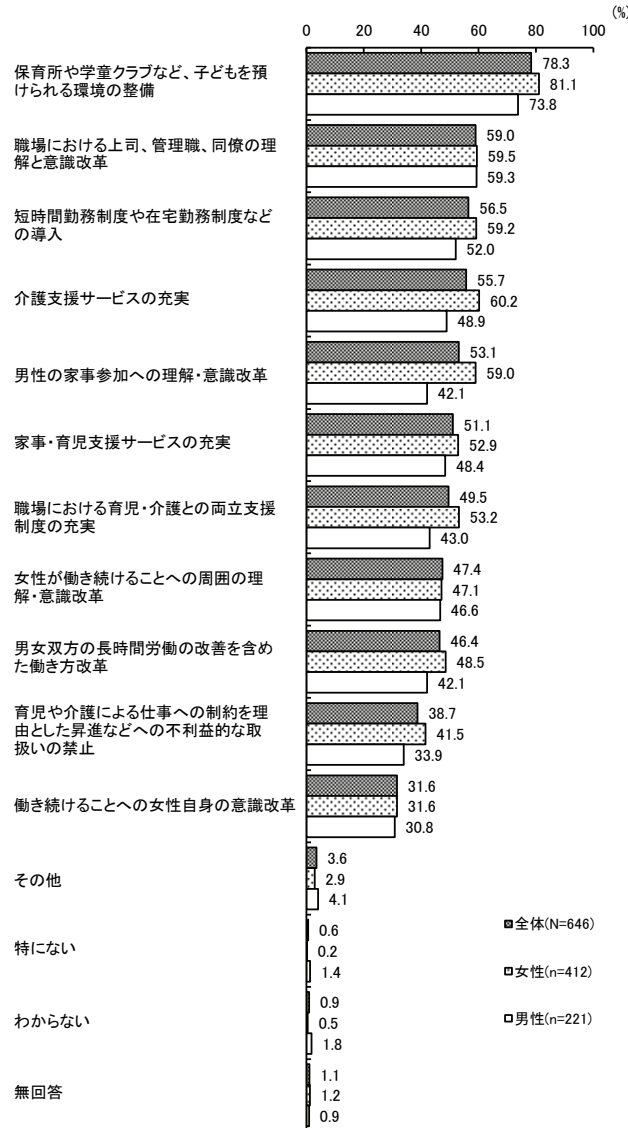
図表 I-10-1-② 女性が働くことに対する考え

(令和3年調査・平成28年調査:全体、性別)

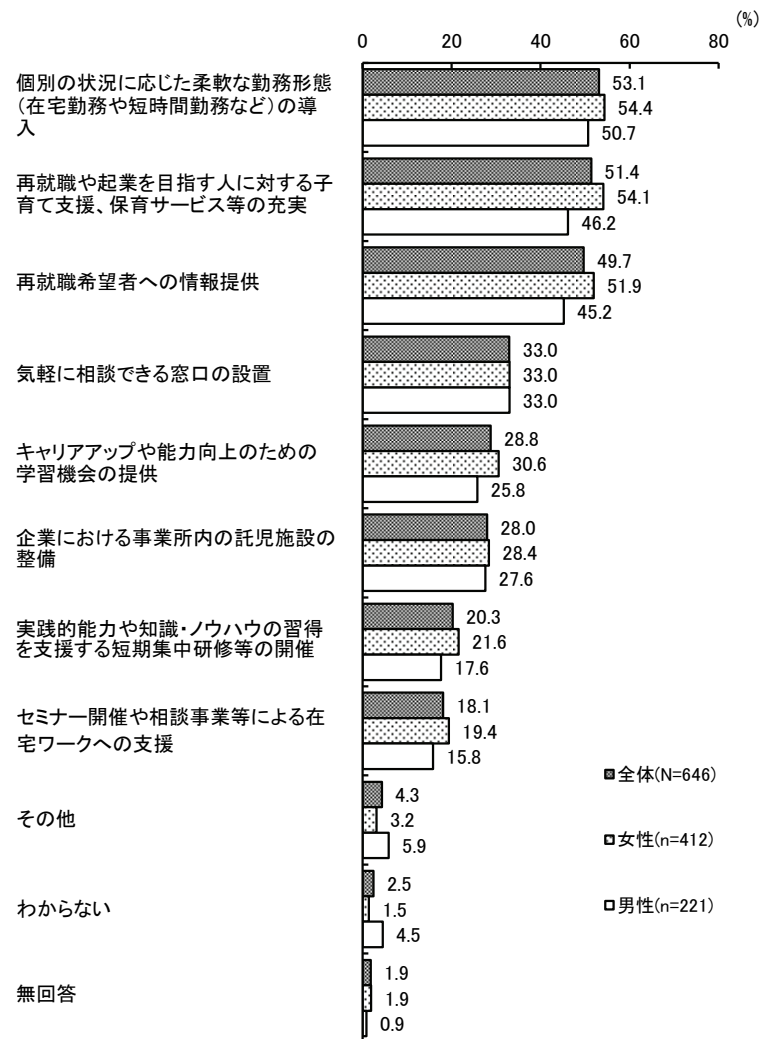


図表 I-10-2 女性が出産・育児・介護により離職せず同じ職場で働き続けるために必要なこと

(全体、性別:複数回答)



図表 I-10-3 女性が再就職や起業にチャレンジする際に必要だと思うこと  
(全体、性別:複数回答)



## 11 区の男女共同参画の取組

- ◆ 女性センター「ブーケ 21」について、全体では、＜利用層＞（「日頃、頻繁に施設を利用している」と「たまに利用している、または利用したことがある」と「講演会、セミナー、中央区ブーケ祭りなどで訪れたことがある」の合計）は 7.4%、＜認知・非利用層＞（「利用したことはないが、活動内容は知っている」と「利用したことはなく、活動内容も知らないが、施設があることは知っている」の合計）は 45.0%であり、＜非認知層＞（「施設があることを知らない」）は 45.8%となっている。＜非認知層＞の割合は、性別にみると男性が、居住地域別にみると日本橋地域が、居住歴別にみると居住歴の短い人ほど、高くなっている。（図表 I-11-1）（問 30）
- ◆ 女性センター「ブーケ 21」事業の認知状況について、事業を「知っている」の割合は、全体では、『「ブーケ 21」女性相談』（13.6%）、『中央区ブーケ祭り』（12.2%）の順で高い。事業の利用意向をみると、事業を「利用したい」の割合は、全体では、『「ブーケ 21」ホームページ』（30.3%）が最も高く、次いで『「ブーケ 21」女性相談』（26.9%）、『中央区男女共同参画ニュース「Bouquet」』（23.2%）となっている。（図表 I-11-2-①、図表 I-11-2-②）（問 31）
- ◆ 男女共同参画を進めるために区が力を入れるべきことは、全体では、「男女ともに働きやすい職場をつくるための企業への啓発」（52.2%）が最も多く、次いで「子育て・介護などで仕事を中断した人への再就職支援」（44.7%）、「育児や介護と仕事や活動の両立を支援する施設・サービスの充実」（44.4%）、「学校における男女平等教育の推進」（43.2%）となっている。平成 28 年調査と比較すると、「学校における男女平等教育の推進」（令和 3 年:43.1%、平成 28 年:25.8%）が 17.3 ポイント高くなっている。（図表 I-11-3-①、図表 I-11-3-②）（問 32）

図表 I-11-1 女性センター「ブーケ21」の認知度  
(全体、性別、居住地域別、居住歴別)

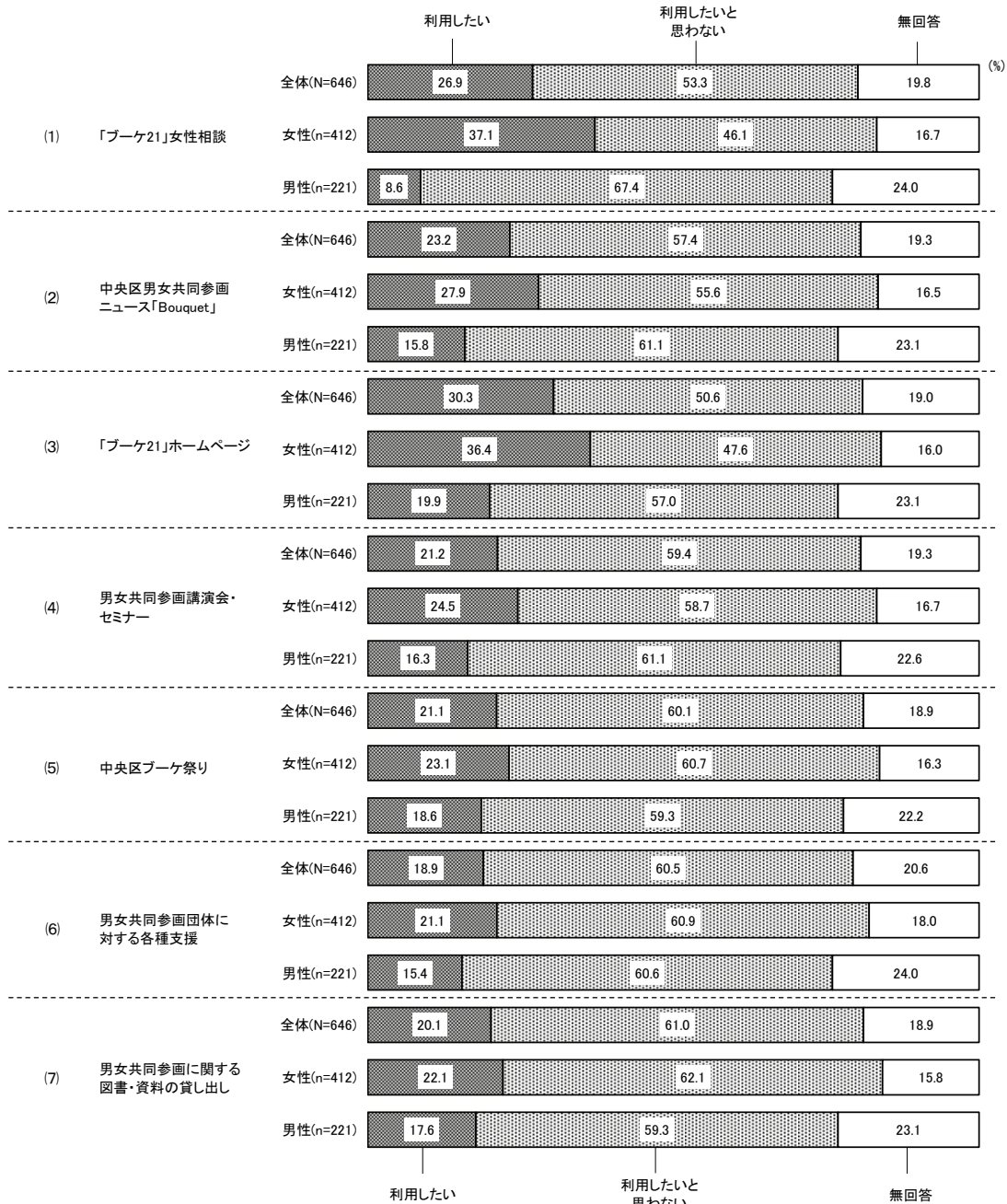
[上段:実数、下段:%]

	利用層			認知・非利用層		非認知層	無回答		
	て日 い頃 る、 頻 繁 に 施 設 を 利 用 し	はた 利用 した こと が あ る、 また	ブ 講 演 会 、 セ ミ ナ ー 、 中 央 区 こ の 祭 り な ど で 訪 れ た こ こ	動 利 用 し た こ と は あ る が、 活	あ 内 容 も 知 ら な い が、 施 設 が 活 動	施 設 が あ る こ と を 知 ら な い			
全 体	(N=646) 100.0	4 0.6	20 3.1	24 3.7	50 7.7	241 37.3	296 45.8	11 1.7	
性別	女 性	(n=412) 100.0	3 0.7	17 4.1	21 5.1	30 7.3	173 42.0	163 39.6	5 1.2
	男 性	(n=221) 100.0	1 0.5	3 1.4	3 1.4	19 8.6	66 29.9	126 57.0	3 1.4
居住地域別	京 橋 地 域	(n=153) 100.0	2 1.3	5 3.3	11 7.2	17 11.1	81 52.9	35 22.9	2 1.3
	日 本 橋 地 域	(n=204) 100.0	1 0.5	3 1.5	6 2.9	12 5.9	57 27.9	123 60.3	2 1.0
	月 島 地 域	(n=278) 100.0	1 0.4	11 4.0	7 2.5	20 7.2	101 36.3	133 47.8	5 1.8
居住歴別	3 年 未 満	(n=82) 100.0	0 0.0	0 0.0	1 1.2	2 2.4	17 20.7	62 75.6	0 0.0
	3 年 以 上 ~ 6 年 未 満	(n=102) 100.0	0 0.0	1 1.0	1 1.0	3 2.9	29 28.4	68 66.7	0 0.0
	6 年 以 上 ~ 10 年 未 満	(n=84) 100.0	0 0.0	2 2.4	3 3.6	6 7.1	27 32.1	46 54.8	0 0.0
	10 年 以 上 ~ 15 年 未 満	(n=93) 100.0	0 0.0	2 2.2	2 2.2	6 6.5	39 41.9	44 47.3	0 0.0
	15 年 以 上 ~ 20 年 未 満	(n=71) 100.0	0 0.0	3 4.2	5 7.0	5 7.0	32 45.1	25 35.2	1 1.4
	20 年 以 上	(n=203) 100.0	4 2.0	11 5.4	12 5.9	27 13.3	96 47.3	45 22.2	8 3.9

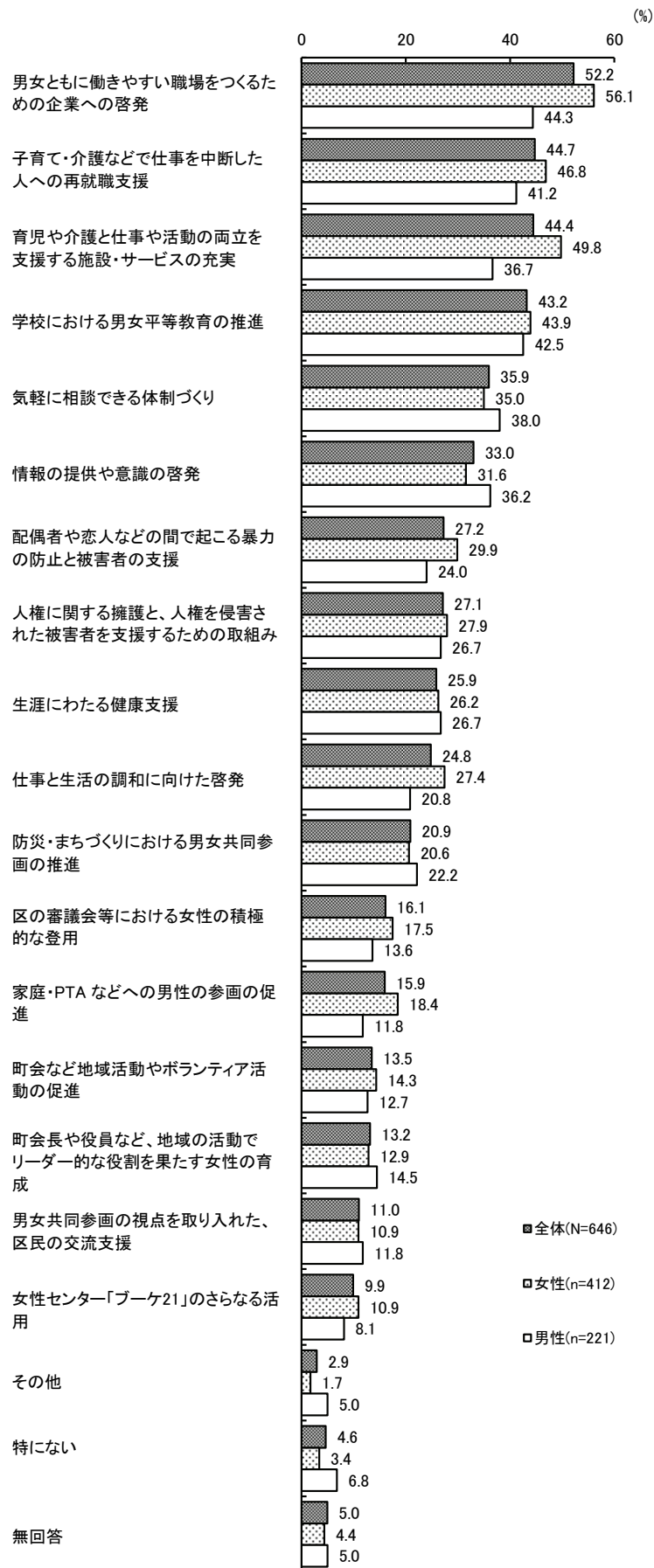
図表 I-11-2-① 女性センター「ブーケ21」事業の【現在の認知状況】  
 (「知っている」と回答した割合) (全体、性別)

		[上段:実数、下段:%]						
		「ブーケ21」女性相談	中央区ブーケ祭り	男女共同参画講演会・セミナー	「ブーケ21」ホームページ	「ニュースBouquet」	図書・資料の貸し出し	男女共同参画団体に対する各種支援
全	体 (N=646)	88 100.0	79 12.2	75 11.6	69 10.7	61 9.4	39 6.0	38 5.9
性別	女性 (n=412)	67 100.0	64 15.5	57 13.8	52 12.6	48 11.7	29 7.0	24 5.8
	男性 (n=221)	20 100.0	14 6.3	17 7.7	16 7.2	12 5.4	9 4.1	13 5.9

図表 I-11-2-② 女性センター「ブーケ21」事業の【今後の利用意向】 (全体、性別)

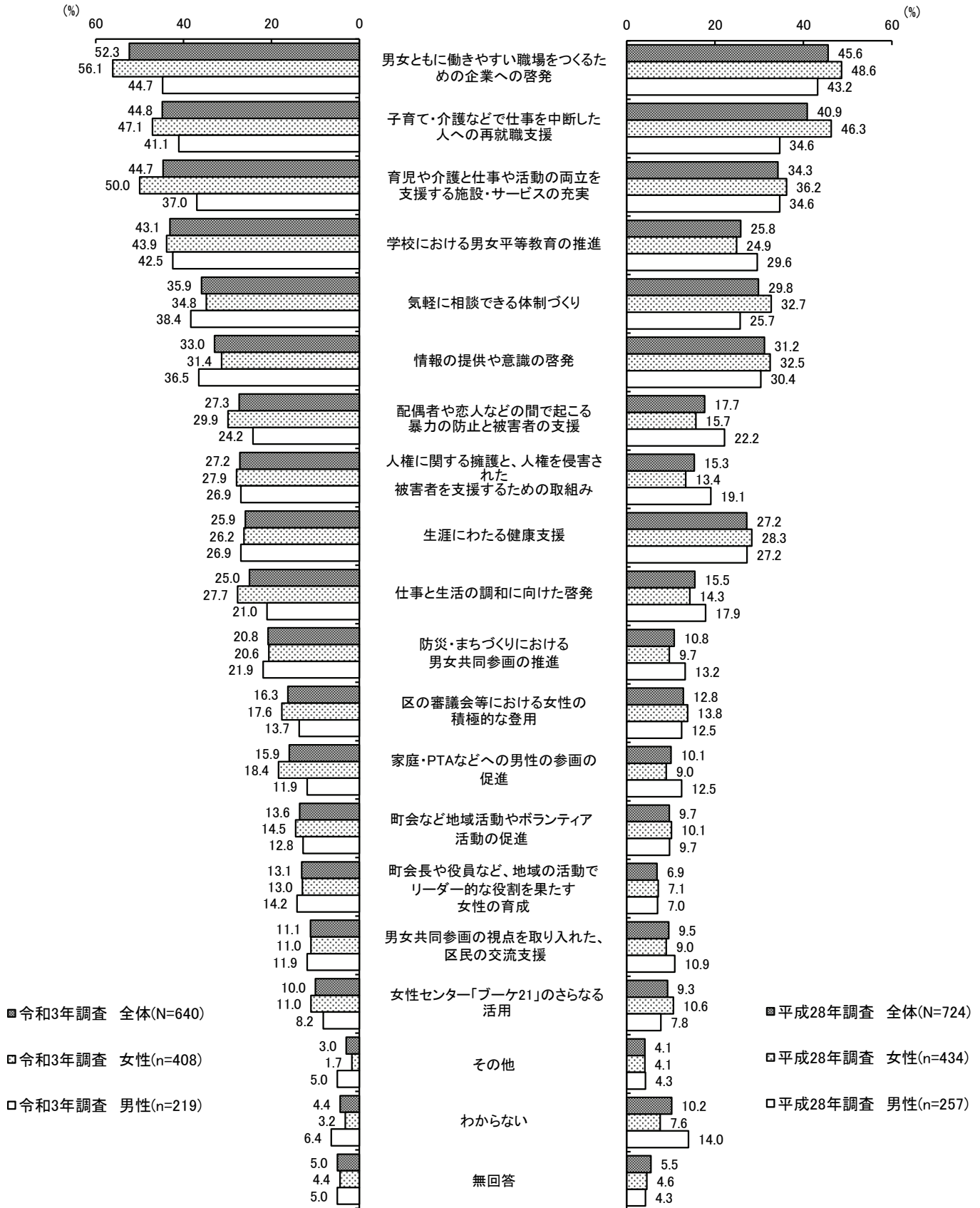


図表 I-11-3-① 男女共同参画を進めるために区が力を入れるべきこと  
(全体、性別:複数回答)



図表 I-11-3-② 男女共同参画を進めるために区が力を入れるべきこと

(令和3年調査・平成28年調査:全体、性別:複数回答)



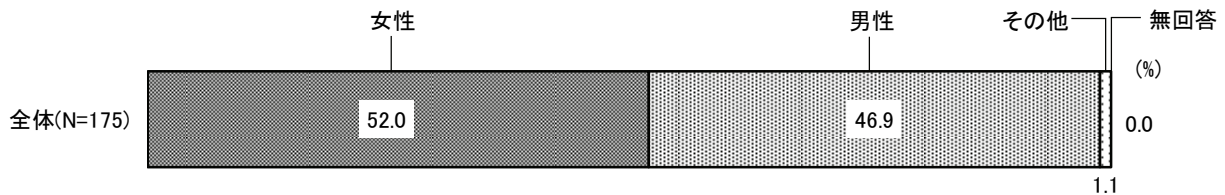


## 若年層調査

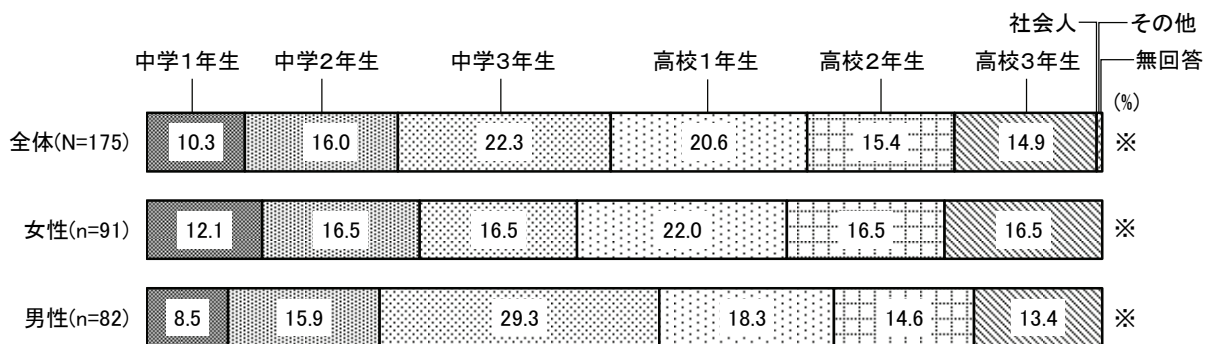
### 1 回答者のプロフィール

- ◆ 性別は、「女性」が52.0%、「男性」が46.9%、「その他」が1.1%となっている。（図表Ⅱ-1-1）（問1）
- ◆ 学年は、全体では、「中学3年生」（22.3%）が最も多く、次いで「高校1年生」（20.6%）となっている。（図表Ⅱ-1-2）（問2）
- ◆ 父親の働き方は、全体では、「外で働いている」（79.4%）が最も多く、次いで「家で働いている（一時的にリモートワークをしている場合は含まない）」（9.7%）となっている。（図表Ⅱ-1-3-①）（問3（1））
- ◆ 母親の働き方は、全体では、「外で働いている」（54.9%）が最も多く、次いで「主に家で家事や育児等をしている」（32.0%）となっている。（図表Ⅱ-1-3-②）（問3（2））

図表Ⅱ-1-1 性別（全体）



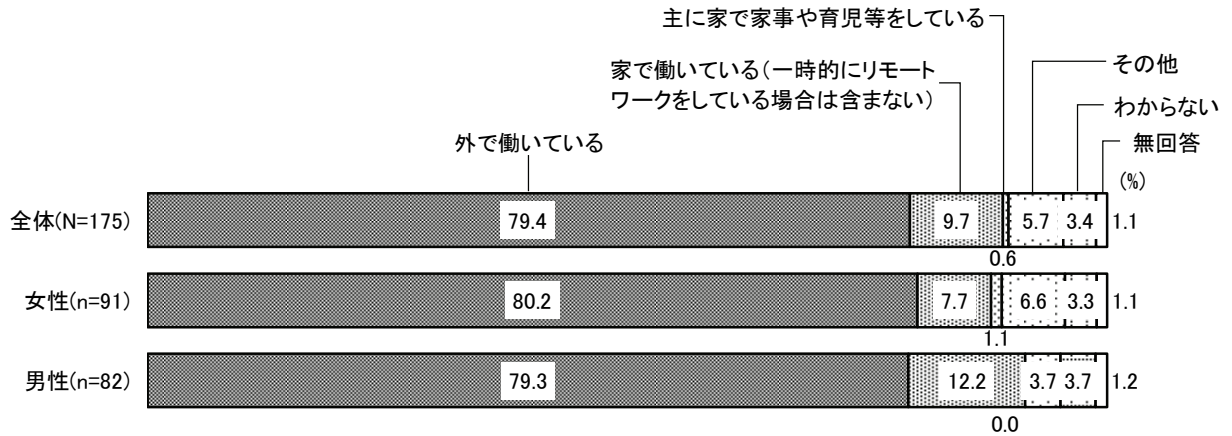
図表Ⅱ-1-2 学年（全体、性別）



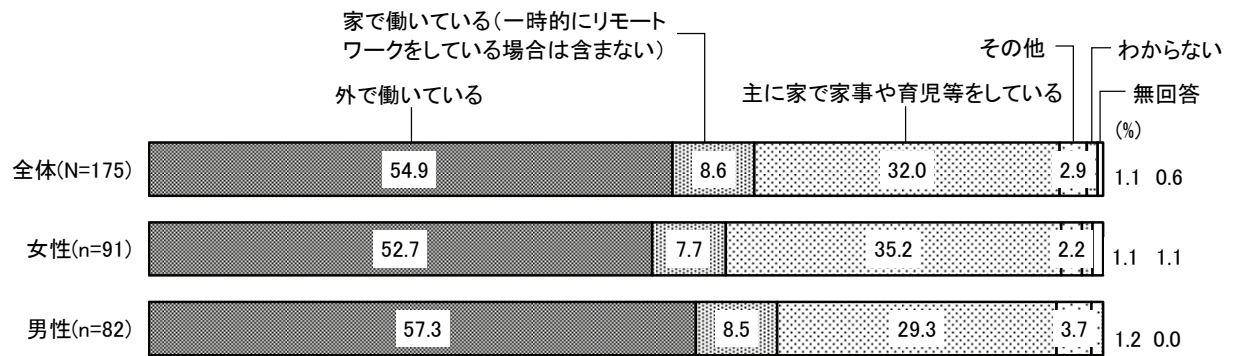
※ 全体・性別の社会人・その他・無回答の数値

	社会人	その他	無回答
全体	0.0	0.6	0.0
女性	0.0	0.0	0.0
男性	0.0	0.0	0.0

図表Ⅱ－１－３－① 父親の働き方（全体、性別）



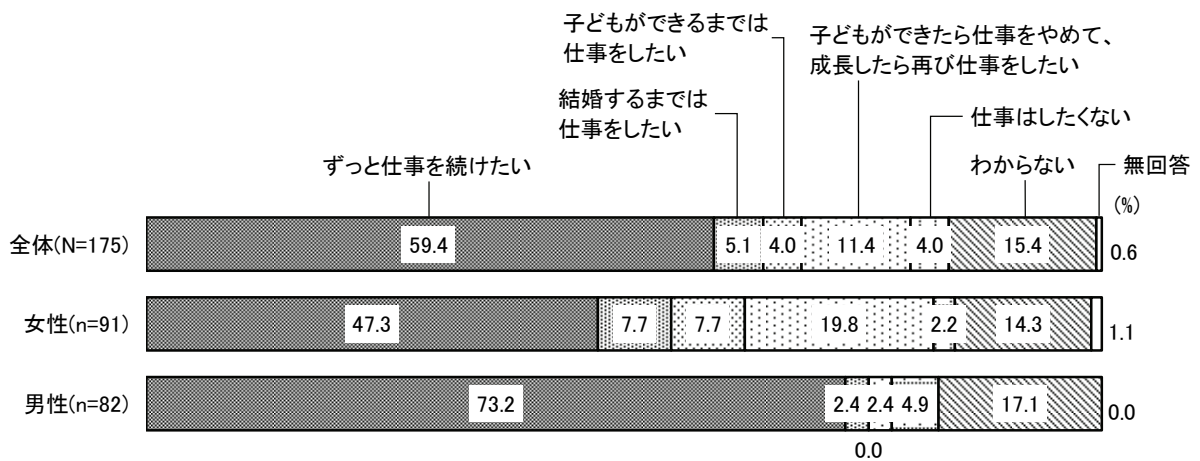
図表Ⅱ－１－３－② 母親の働き方（全体、性別）



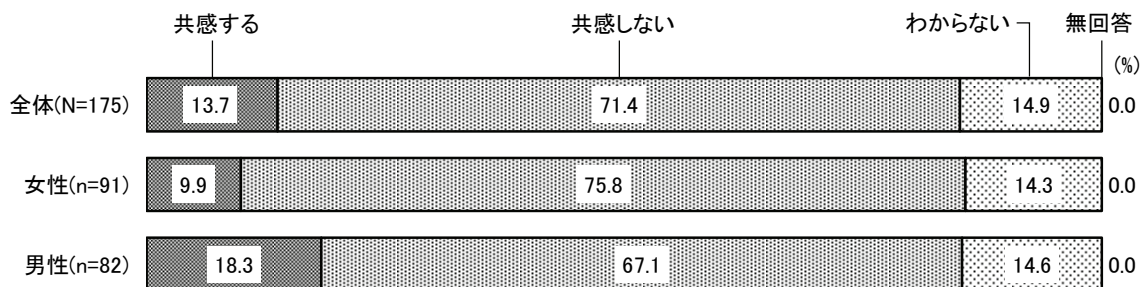
## 2 結婚、固定的性別役割分担に対する考え方

- ◆ 将来の働き方への希望は、全体では、「ずっと仕事を続けたい」(59.4%)が最も多く、次いで「わからない」(15.4%)、「子どもができれば仕事をやめて、子どもが成長したら再び仕事をしたい」(11.4%)となっている。性別にみると、「ずっと仕事を続けたい」は、女性が47.3%に対して男性は73.2%となっている。(図表Ⅱ-2-1)(問4)
- ◆ 固定的性別役割分担に対する考え方は、全体では、「共感しない」が71.4%であった。性別でみると、「共感する」は、女性が9.9%であるのに対し、男性は18.3%となっている。(図表Ⅱ-2-2)(問5)
- ◆ 最近した家での手伝いは、全体では、「食事のしたくや後かたづけ」(63.4%)が最も多く、次いで「洗たく物干しや取り込むなど」(38.9%)、「家の中のそうじ」(33.7%)となっている。(図表Ⅱ-2-3)(問6)

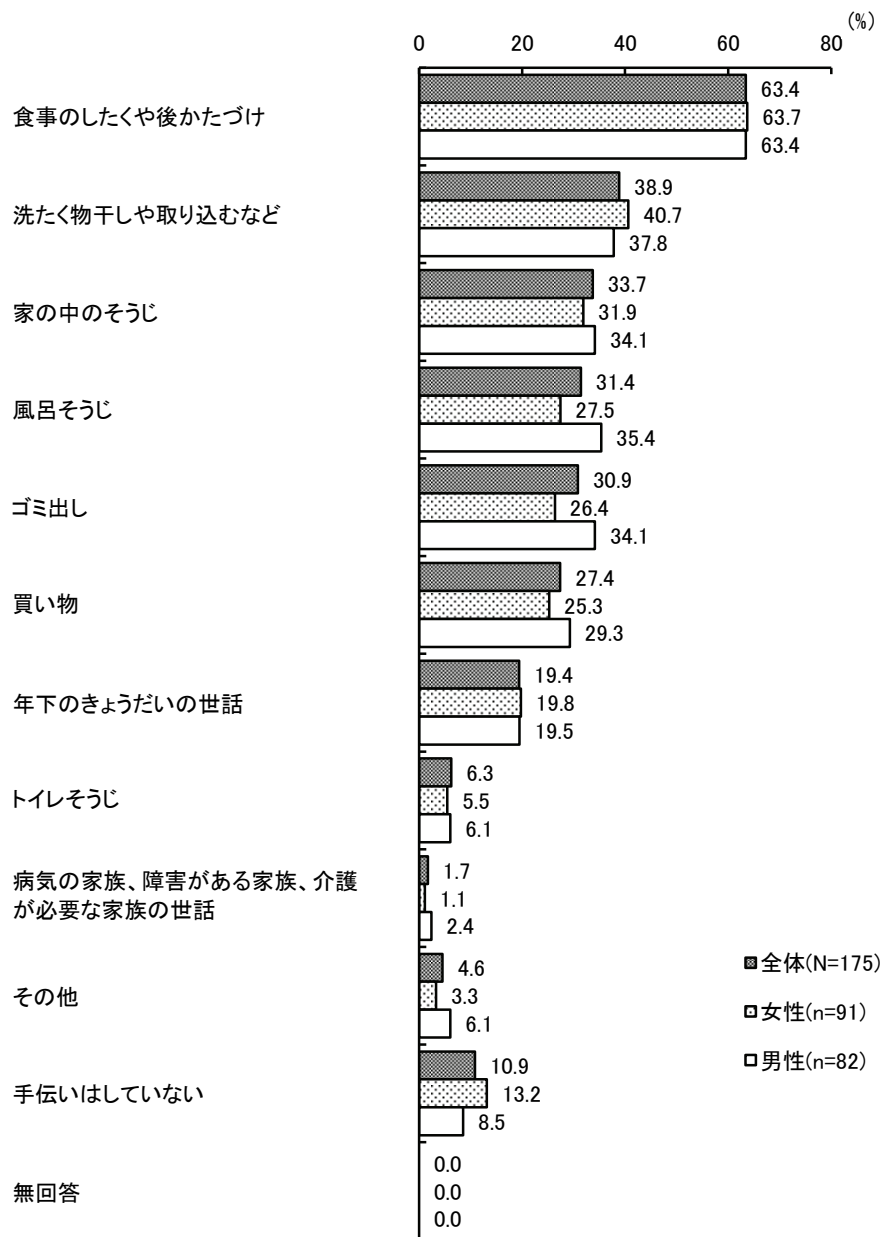
図表Ⅱ-2-1 将来の働き方への希望(全体、性別)



図表Ⅱ-2-2 固定的性別役割分担に対する考え方(全体、性別)



図表Ⅱ-2-3 最近した家での手伝い（全体、性別：複数回答）



### 3 デートDV

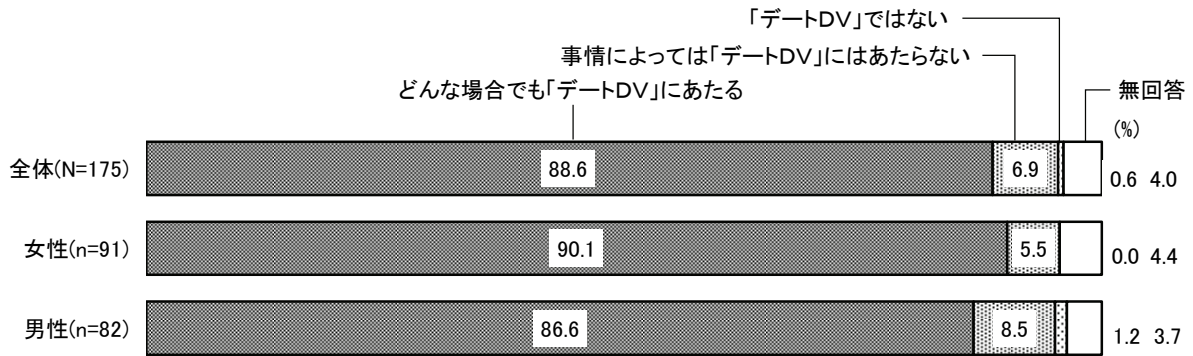
- ◆ デートDVの言葉の認知度は、全体では、「聞いたことがない」(55.4%)が最も多く、次いで「意味を知っている」(24.0%)、「聞いたことはあるが、意味は知らない」(20.0%)となっている。性別にみると、女性は「意味を知っている」の割合が27.5%であるのに対して、男性は20.7%となっている。また学年別にみると、「意味を知っている」の割合は、高校2年生(55.6%)、高校3年生(42.3%)は高くなっている。(図表Ⅱ-3-1)(問7)
- ◆ デートDVに対する認識について、『たたく、ける、髪を引っ張る、物を投げつける』は、全体では、「どんな場合でも「デートDV」にあたる」が88.6%となっている。(図表Ⅱ-3-2)(問8(1))
- ◆ 『ばかにしたり、傷つける言葉を言う』は、全体では、「どんな場合でも「デートDV」にあたる」(63.4%)が最も多く、次いで「事情によっては「デートDV」にはあたらない」(32.0%)となっている。(図表Ⅱ-3-2)(問8(2))
- ◆ 『友人との連絡・付き合いを制限する』は、全体では、「どんな場合でも「デートDV」にあたる」が46.9%、「事情によっては「デートDV」にはあたらない」が41.1%となっている。性別にみると、女性は「どんな場合でも「デートDV」にあたる」(51.6%)が多く、男性は「事情によっては「デートDV」にはあたらない」(43.9%)が多くなっている。また、男性は「「デートDV」ではない」が9.8%となっている。(図表Ⅱ-3-2)(問8(3))
- ◆ 『いやがっているのにキスしたり、体にさわる』は、全体では「どんな場合でも「デートDV」にあたる」が83.4%となっている。(図表Ⅱ-3-2)(問8(4))

図表Ⅱ-3-1 デートDVの言葉の認知度(全体、性別、学年別)

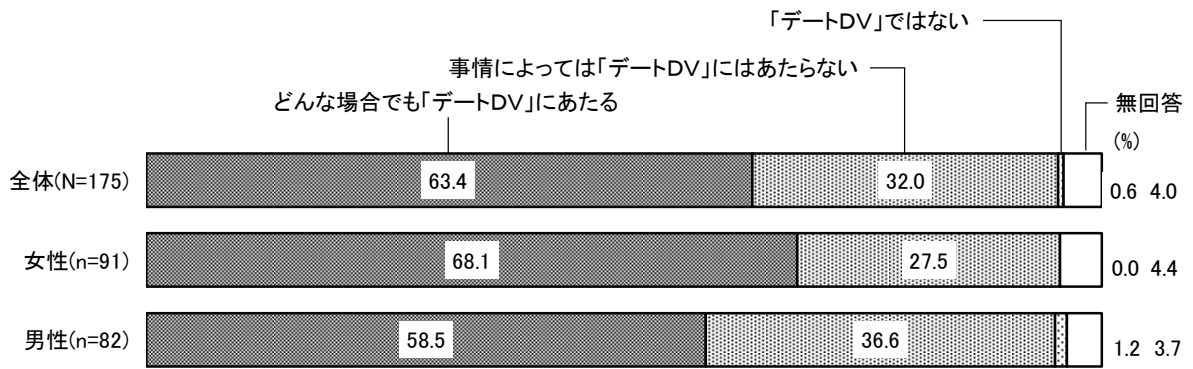
		[上段:実数、下段:%]			
		意味を知っている	聞いたことはあるが、意味は知らない	聞いたことがない	無回答
全 体 (N=175)		42 100.0	35 20.0	97 55.4	1 0.6
性別	女 性 (N=91)	25 100.0	18 19.8	48 52.7	0 0.0
	男 性 (N=82)	17 100.0	16 19.5	48 58.5	1 1.2
学年別	中 学 1 年 生 (n=18)	3 100.0	4 22.2	11 61.1	0 0.0
	中 学 2 年 生 (n=28)	2 100.0	4 14.3	22 78.6	0 0.0
	中 学 3 年 生 (n=39)	4 100.0	8 20.5	27 69.2	0 0.0
	高 校 1 年 生 (n=36)	7 100.0	8 22.2	20 55.6	1 2.8
	高 校 2 年 生 (n=27)	15 100.0	3 11.1	9 33.3	0 0.0
	高 校 3 年 生 (n=26)	11 100.0	8 30.8	7 26.9	0 0.0
	社 会 人 (n=0)	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0
	そ の 他 (n=1)	0 100.0	0 0.0	1 100.0	0 0.0

図表Ⅱ-3-2 デートDVに対する認識（全体、性別）

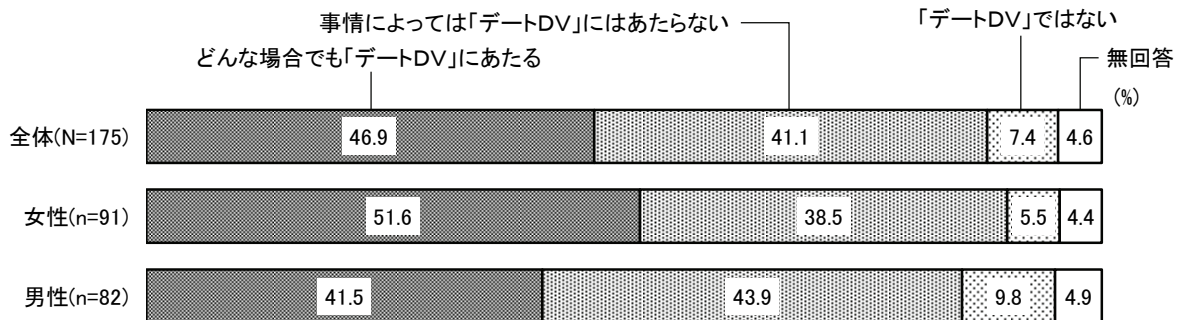
【たたく、ける、髪を引っ張る、物を投げつける】



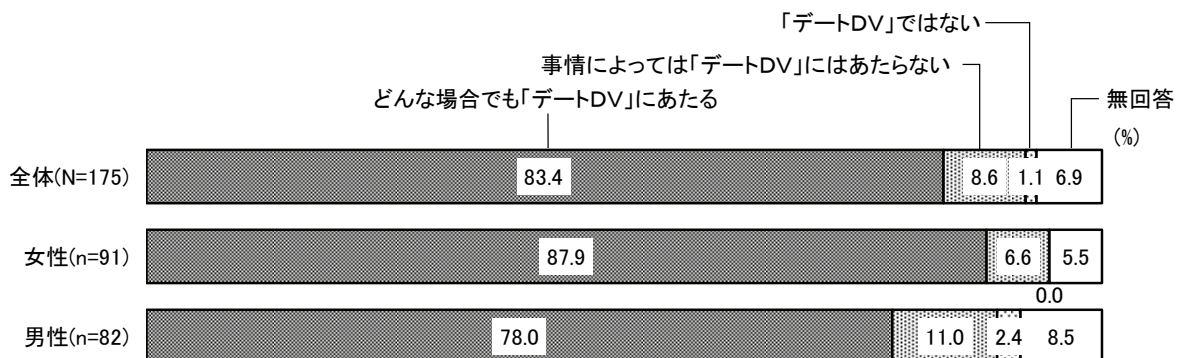
【ばかにしたり、傷つける言葉を言う】



【友人との連絡・付き合いを制限する】



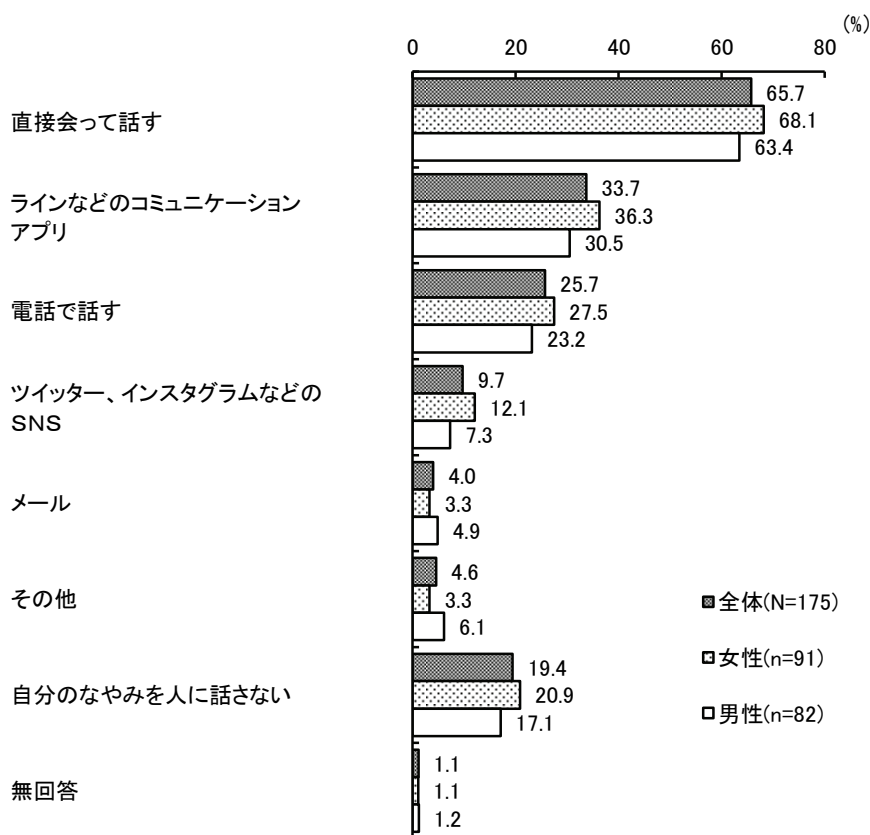
【いやがっているのにキスしたり、体にさわる】



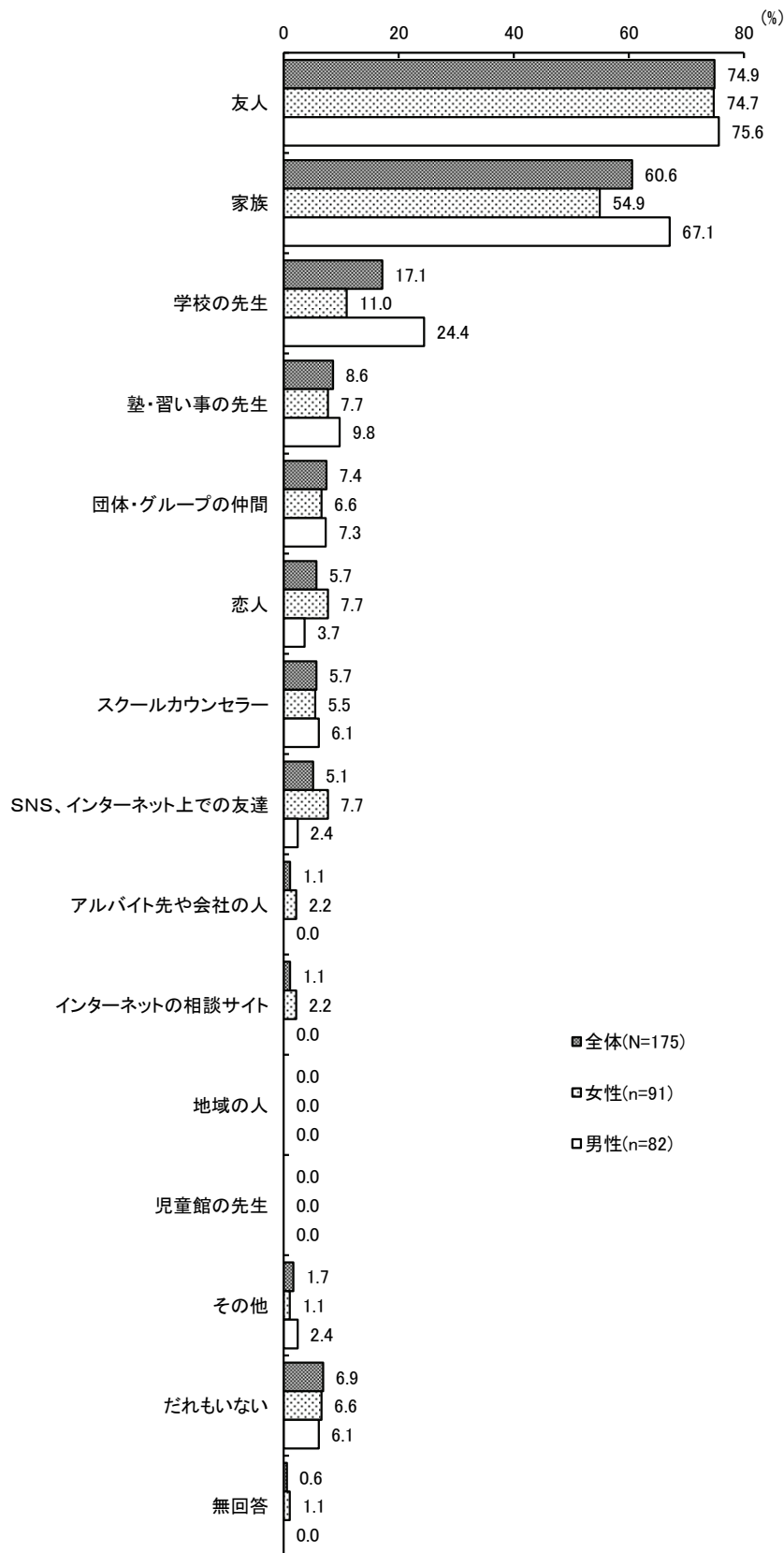
## 4 悩み

- ◆ 悩みを話す方法は、全体では、「直接会って話す」(65.7%)が最も多く、次いで「ラインなどのコミュニケーションアプリ」(33.7%)、「電話で話す」(25.7%)となっている。「自分のなやみを人に話さない」は19.4%であった。(図表Ⅱ-4-1)(問9)
- ◆ 相談したいことや聞いてほしいことがあったときに気軽に話せる相手は、全体では、「友人」(74.9%)が最も多く、次いで「家族」(60.6%)、「学校の先生」(17.1%)となっている。「だれもない」は6.9%であった。(図表Ⅱ-4-2)(問10)
- ◆ 性(性的指向)や心の性(性自認)について悩んだことの有無について、全体では、<なやんだことがある>(「なやんだことがあります(今、なやんでいる)」、周りでなやんでいる人がいた(いる)と「なやんだことがあります(今、なやんでいる)が、周りになやんでいる人はいなかった」の合計)は13.7%であった。また、<周りになやんでいる人がいた>(「なやんだことがあります(今、なやんでいる)」、周りでなやんでいる人がいた(いる)と「なやんだことはないが、周りになやんでいる人がいた(いる)」の合計)は、24.5%であった。(図表Ⅱ-4-3)(問11)

図表Ⅱ-4-1 悩みを話す方法(全体、性別:複数回答)

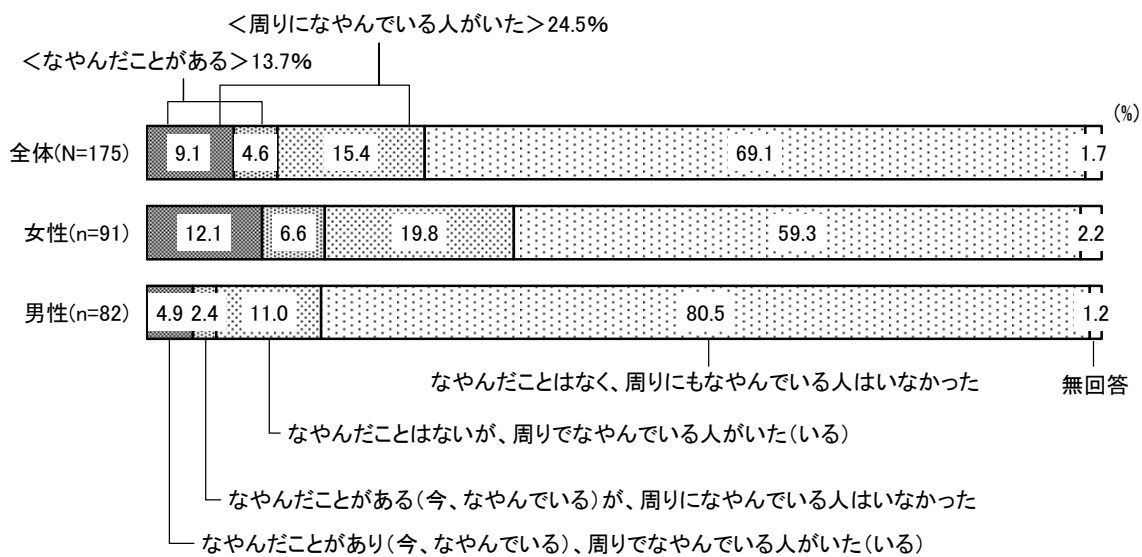


図表Ⅱ－４－２ 相談したいことや聞いてほしいことがあったときに気軽に話せる相手  
(全体、性別：複数回答)





図表Ⅱ-4-3 性（性的指向）や心の性（性自認）について悩んだことの有無  
（全体、性別）



**中央区男女共同参画に関するアンケート調査報告書**  
**【概要版】**

令和4(2022)年3月 発行

刊行物登録番号

3-111

**発行：中央区総務部総務課**  
中央区湊一丁目1番1号  
中央区立女性センター「ブーケ21」内  
電話 03-5543-0651 (直通)

**実施：株式会社生活構造研究所**  
千代田区麴町二丁目5番地4 第2押田ビル  
電話 03-5275-7861 (代表)